

国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』翻刻と校注(3)

劉 玲

本稿は、中田祝夫編抄物大系(勉強社、一九七七年)所収の、国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』(影印本)を底本として使用する。当該抄物の成立、資料的価値については、「国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』翻刻と校注(1)」(筑波大学人文社会科学研究所『筑波日本語研究』第17号)と「国立公文書館内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』翻刻と校注(2)」(同18号)を参照されたい。本稿では、前記の二稿に引き続き、主として、抄中に引かれた漢籍及び幻雲抄に集成している五山僧の諸家に注目し、それができる限り明記して、幻雲抄を解説する際の手がかりになるようつとめる。なお、翻刻・校注上の諸事項については、前記の二稿に詳しいが、要点また前記の二稿において説明していない事項について記しておく。

一 翻刻の範囲を底本の二七頁から一七一頁とする。

一 基本的に、原典テキストが写された方形の枠線の後に置かれていた抄文の部分を翻刻の対象とする。若干、その枠線内及び枠線外の周辺に書き込んだ小文字書きの抄文が存在するが、影印本で判読しにくい箇所が多いため、本稿では翻刻しないことがある。

一 漢籍の引用が見られる場合、その書名、または篇目名や

章節名、作者名に線で記す。例えば「王昌——新唐書百二十八 文藝傳……」(一二七2)、「養按 月令 孟夏之月……」(二四八18)、「凡人指皇都 為故園者 岑參詩 遙憐故園菊……」(二二八4)、「張繼再到楓橋詩 云 白髮重一夢中……」(一二三五12)など。ただ、今回主として『国学宝典』ネットワーク版(<http://www.gyod.com/>)、「中央研究院漢籍電子文獻瀚典全文檢索系統」(<http://hanj.sinica.edu.tw/>)、「中国基本古籍庫」(黃山書社出版)を検索資料として使用することにし、一々原本で確認するに至っていない。中には、書名未記載だろうと思われる場合が若干見られるが、今回は特に記さない。例えば、一六六4〜一六六14にあるように、「綜目」から「以禦魑魅」まで続く文について漢籍の書名が記されていないが、『国学宝典』によれば『文選』卷三・東京賦にほぼ同文のものが確認できる。書名未記載の場合については、拙稿『『三体詩幻雲抄』を通してみる室町時代における漢籍流布の状況』(筑波大学国語国文学会『日本語と日本文学』55号)においても言及しており、参照されたい。

一 前記の検索資料に比較した際、引用された漢籍の文章に

において、異文が存すると思われる場合が少なくない。例えば、『茗溪漁隱叢話』から引かれる「漁隱後集二 復齋謾録云 峽州記 行者歌曰 巴東三峽猿啼悲」(一五五一) については、『国字宝典』では「猿啼悲」とある。また、誤記だろうと思われる箇所も見られる。例えば、「復齋謾録」(二四四九) から引かれる「唐孫叔白有絳照應温泉詩云」(二四四八) においては、「孫叔白」とあるべきところを「孫叔白」に誤植されたり、「漁隱後集」(一五五一) から引かれる「梁簡文巴東三峽歌云 巴東三峽長 猿鳴三声 淚沾裳」(二五五三) においては、「巴東三峽巫峽長」とあるべきところに「巫峽長」の三文字が脱落したり、「天子之居 必以衆大之辞之辞言之」(一四四一) においては、「之辞」は衍字であったりすると見られる。ただ、それら漢籍の底本がまだ明からにしていなかったため、今回特に改めず、底本の通りに写す。

— 幻雲抄に集成している五山僧の諸家の僧名については | 線で記す。例えば「雪本」唐書文藝傳下……」(一二七七) においては、「雪本」(蘭坡景藍)の横に | 線を引く。また、「風抄」心田云 大原千今在瀟陵西……」(二二八五) については、「大原」より以降は「風抄」(万里集九)の説において「心田」(心田清播)が引かれていると見えるような箇所について、「風抄」並びに「心田」の両方に | 線を引く。ただ、「桃抄」或云 水雖……」(二四〇六)にあるように、「或云」より以降は先人の誰かの説である場合が若干あるが、僧名が記されておらず、今回は特に

記さない。ほかに、「或曰」(二五〇一〇)と記された場合が若干あり、同様に処理する。

— 漢字については、底本の形態を重んじ、異体(略体・俗体を含む)の文字をそのまま写し、また、末尾「異体字一覽」にまとめる。そのまま再現できない場合は通行体に改めるが、一々説明しない。例えば、「春夢醒」(一三二一七)・「蜀江二臨」(一七〇二一)など。なお、一部誤読を招きやすいものについては、「一」内において通行体の文字を()内に入れて記すことがある。また、若干口で示し、「一」内に「火*回」(烟)や「ム+虫」(雖)のように示す場合があり、*印はその二字を左右で組み合わせた文字を、+印はその二字を上下で組み合わせた文字を意味する。なお、初出以降は特に一々記さない。

— 書き入れなどで小文字で二行書きにしてある箇所が少なく、ノ印で改行を示す。例えば、「善住菴也今之應ノ松軒」(二二八一三)とあるのは、「松」字から改行している。

— 仮名については、「子」を「ネ」に改めず、そのままに写す。合字では、「シテ」を「シテ」に、「コト」に改める。

— 踊り字については、漢字の場合は「々」に、仮名の場合は「ゝ」に統一する。なお、仮名二つ以上の場合には、「ウヤウ」元白カ列ニ 加ヘラル、也」(二五八一七)のように繰り返して写す。

— 振り仮名、濁点は、そのまま写す。

— 返り点と一・二点は、それぞれ「レ」と「一」・「二」のよ

うに記す。わずか、「上」「中」「下」も施されている場合がある。なお、「若干」、「第一句 我欲」「二仕官而難」「進……」（一六八一）とあるように、「二点」のみで、「一点」が施されていないような場合があるが、底本の通りに写す。

一 転倒符、書入れ指示、挿入符については再現できず、「」内において説明する。

一 見せ消については■で示し、「」内において説明することがある。

一 その他

・ 頁数は底本のそれに従い、漢数字で記す。また、あらたにアラビア数字で行数を記す。

・ 句読点は特につけず、底本の朱点により一文字分をあけることとする。なお、破損や墨汚れ、または不鮮明であるため、判明できない場合に、校注者の判断による。

・ 漢字や仮名について、破損や墨汚れ、または不鮮明であるため、判読できない場合に、□で示す。推測されるものがあれば、それの中に入れる。

・ 若干特殊な図や記号について、再現していない。例えば、一五七15「師卦」の直後に、同16「蹇」の直前に見える図、一六〇18や同21冒頭に見える「○」らしい記号など。

・ その他の説明事項があれば、「」の内に記す。

一二七

1 巖子安和韻 題別作送 昌齡赴南國 李浦之京 途中相逢【「送」右傍に「魯所考 只作別」とある】【國(国)】【京

(京)】【この行まで「別李浦之京」原典テキストが置かれている】

2 王昌——新唐書百二十八 文藝傳 孟浩然附之 才子

傳 王昌 字少伯 太原人 開元十五年 李□榜進士【「王

昌」右傍に「盛唐」とある】【「然」「附」間に挿入符あり、右傍に「傳」。「孟浩然傳附之」にすべき】【□「止+疑」。

右傍に「疑」

3 授汜水尉 又中宏■辭 迁校書郎 云々 昌齡工詩 續

密而清 ■時称詩家夫子王江寧 盖曾為【「而」「清」間に挿入符あり、右傍に「思」。「續密而思清」にすべき】【■

時、「晴」見せ消】【迁(遷)】【盖(蓋)】【曾(嘗)】

4 江寧令 云々 履歷 江寧人 又按唐書云 少伯江寧人

又新唐王昌齡 江寧人 又瑯□人也【「唐」「王」間に挿入符あり、右傍に「書」。「新唐書王昌齡」にすべき】【□

「王*耶」

5 注 孟子曰 孟子十二 有人於此 越人関【「レ」弓而射

「レ」之 則已談笑而道之 無「レ」他 疏之也 其兄関【「レ」弓而射「レ」之 則已

垂涕泣而道之 無他 戚之也 小弁之怨 親「レ」々也 親 【「レ」々 仁也 云々【「戚之」、左傍に戚

【「レ」之」とある】【「小弁」左傍に「小雅」】

7 雪本 唐書文藝傳下 百傳二十八云 王昌齡 字少伯

江寧人 第進士 補秘書郎 又中宏辭 遷汜水

8 尉 不護細行 貶龍標尉 以世乱□鄉里 為刺使閭丘曉所殺 張鎰按軍河南 兵大集 曉最【□「*不」(還)】

- 9 后期 将戮之 詞曰 有新乞貸餘命 鎬曰 王昌齡之親
欲与誰養 曉默然 昌齡詩縝密而
- 10 思清 時謂王江寧 汜刼刼 符咸切 貸 玉篇 他代
切 以物与人更還主也【勻(韻)】【篇(篇)】
- 11 又才子傳二云 昌齡太原人 時称詩家夫子 云々
- 一一八
- 1 故園 昌齡 大原人 而在江寧 故曰今在也 云々 昌
齡此詩同時之詩 唐音遺響 重別李評事【大(太)】
- 2 詩云 莫道秋江離別難 舟船明日是長安 吳姬緩舞留人
醉 隨意清楓白露寒 幻謂 李評【船(船)】【醉(醉)】
- 3 事 恐李浦平
- 4 凡人指皇都 為故園者 岑參詩 遙憐故園菊 今傍戰場
開 是也 淵講 師云 今在二字 盖非【參(參)】【淵
(淵)】
- 5 常詩所用之語也 言王氏本貫 旧□太原 中年移在江寧
也 譬ハ 日本ナラハ 本ハ 伊勢ノ生レナルカ【□ム
十虫(雖)】
- 6 年ハ 家ヲ尾張ヘ移シタレハ 故園ハ 今在二其処
西【二】ト云ヘキ也 言連年思故園 甚切也 セメテ 京
ヘノ
- 7 便宜カナト思テ 出テ、見処ニ 人コン トヲレ 李
浦ハ 王知音也 故雖醉中 不見忘也 又故園エノ コツ
ケ【コ】「ツ」間に挿入符あり、右傍に「ト」。「コトツケ」
にすべき。
- 8 カセタサニ 不思依処ニテ 逢タレトモ チツトモ 不
迷也 三四句ハ 我小弟幼少ナレハ 吾留守ニ 学問ヲ
ハセスシテ
- 9 漁獵シテ 送日月也 コレヲ 戒メタイソ 此状ニハ
書ニカキツクシワ エセヌ 紙短心長也 一行ナレトモ
愁淚ヲ 滴尽シテ
- 10 カイタト ヲセタレヨ也 盖詩志之所之 友于兄弟 則
孝于母父 孝于父母 則忠于君也 昌齡仁心 隱然言外
【詩】「志」間に挿入符あり、右傍に「者」。「詩者 志之
所之」【二】「子」「母」間に挿入符あり、「父」右傍に転倒符
ある。「孝于父母」にすべき。
- 11 村講 續翠云 此詩不遠聖人之教 故載此集 村云
醉不迷三字 為一篇主【續(統)】【翠(翠)】
- 12 故園 春耕云 今字 東西南北之辭也 在鎌倉 則京
在西 在九州 則京在東 故曰今在 村云
- 13 春耕義不可也 何処カラ 望ニモ 洛陽東ハ 善住菴也
今之聽ノ松軒 言ハ 故郷ハ 自古至今 在瀨陵西也 今モ
14 モトノ物也 村又云 今字ニ キブク アタラストモ
穩ニ見テ 故園ハ 今現在ニ 瀨陵西ニ アル也 今ハ一
ハヨムマ
- 15 イ□ハカリ ヨムヘキン 捻シテ 今字不穩 風抄
心田云 大原于今在瀨陵西 于今無恙【イ□】右傍に某
字がある
- 16 桃云 江寧建康府一縣也 不當瀨陵西歟 又昌齡 瑯□
人也 瑯□在廣西路賓州 乃南方也【□(王*耶)】【縣(県)】

【當(当)】

- 17 不當瀟陵也 混一方輿勝覽 安西路內有之一說 故園
指長安 凡為臣者 指朝廷為故鄉者
- 18 婦人謂■為婦之例也【「婦」見せ消、右傍に「家」。「謂家」にすべき】
- 19 默云 昌齡 玄宗時人也 蓋玄宗幸蜀後 昌齡以蜀為故園也 幻 或謂 有小弟語 則指親戚所居 似為故園也 親戚今在長安平
- 20 補云 太原ハ 関以西國也 故云 在西也 村云 小弟漁獵比李廣 蓋所以在瀟陵西也 此義不可也 啼字
- 22 ■作涙之訓也 桃云 一封書寄「二」數行「一」啼 トモ可訓ト云フ 幻謂 非也 蘭講 村云 今字ハ 只字ノ心也 輕也【■「訓」見せ消】
- 二一九
- 1 風抄 小弟——漁獵ストモ 一封書寄 數行啼 言小弟雖作小人事 若見吾一封 則必可洒涙也【「寄」左傍「寄」、「啼」左傍に「ナク」】
- 2 一義 賢人未遇 猶作漁獵 如太公漁于渭濱 李廣獵于南山 是也 言小弟未見用 只以漁獵為
- 3 □ 昌齡不能汲引 故臨書而涕泣 此解破天隱注【□「古文」(事)】
- 4 樂天詩 今日因君訪兄弟 數行鄉淚一封書
- 5 杜詩批点 十一送「二」舍弟願赴「二」齊州「二」此 此行 何日到 送汝 万行 啼【「啼」左傍に「ナク」】

- 6 雪本 故園——蓋指長安也 岑參九日思長安故園詩云 強欲登高去 無人送酒來 遙憐故園菊 應
- 7 傍戰場開 凡為士大夫者 指朝廷為故鄉 猶如婦人云々 莫道秋江——白露寒 因是言之故
- 8 園指長安 亦得敗否
- 9 故園——雪本 或曰昌齡 江寧人 或作汜水尉 或作龍標尉 其身 在西 則其鄉在東 其鄉在西 則
- 10 其身 在東 今乃其鄉在西也 時人呼昌齡稱詩家夫子 可知焉 然今与李浦於江畔逢 以知心【「在」見せ消】
- 11 雖醉中不相迷也
- 12 故園云々 二句蓋昌齡自言 々我已離東飄西泊 未嘗忘故園 于時与李浦相逢語 則其境依然在眼也
- 13 故園蓋江寧也 江寧府関以西之州也 張櫓和云 馬頭烟樹指関西 草色娛人道欲迷 江上不
- 14 堪 萬思切 東風処々曉驚啼 第一句以此和一 句可解也【「離(離)」】
- 15 小弟云々 二句蓋樂天江南送小客 因寄徐州兄弟詩 今
- 16 日因訪兄弟云々書之意也 東坡姪安 韻遠來夜坐詩 嗟予潦倒無飯日 今汝蹉跎已半生之語 本于此乎【「節(節)」】
- 17 和云 相逢相別各東西 喜極悲生意兩迷 塞北江南天地闊 雁行飯後鷓鴣啼
- 18 統三 吳彥真故園詩云 故園只在画橋西 碧樹春雲只尺迷 鳥山不知陵谷變 飛來飛去樹【「迷」】「鳥」間に挿入符あり、「山」右傍に転倒符ある。「山鳥」にすべき】

19 頭啼 暗用昌齡韵并案【韵(韻)】【并(並)】

一一〇

1 王維 本集云 与廬員外象題崔处興宗林亭 此時王綰裴

迪丘丹崔处士五人 同時有作 王維【この行まで「題崔處士林亭」原典テキストが置かれている】「題」右傍に「維集作過」】

2 續云 身名不問十年餘 老大誰能更讀書 林中独酌隣家酒 門外時聞長者車 廬象云 映竹時

3 聞轉轆轤 當窓只見網蜘蛛 主人非病常高卧 環堵蒙龐一老儒 裴迪云 喬柯門裡自【卧(臥)】

4 成陰 散髮窓中 維集作空 注一作窓 曾不簪 逍遙且喜從吾事 采□由來非我心 崔興宗云 窮【維集作空 注一作窓】は「窓中」の「窓」字についての注で、小文字書きにすべきだろう。本来「散髮窓中曾不簪」という句】

5 巷空林常閑閉 悠然独卧枕前山 今朝忽枉嵇生駕 倒履開門遥解顏 丘丹云 賣藥或時

6 至 自知來往疏 遽辞池上酌 新得山中書 步出芙蓉府 鼎乘穀□車 猥蒙招隱作 豈耻班生□【往(往)】【穀□(?*束)】【班生□。□【十戸】(廬)】

7 王維詩云 綠樹重陰云々 細集作悠々 注作然 雪本廬象廬鴻之姪也 雪本云 崔处士字 名興宗

8 桃抄云 或抄 載王綰等同時作 未見出處 不足取焉 幻按 王維集林亭詩末載「廬象王綰裴迪崔興宗

9 四人詩【「廬等題曰同前 崔題曰訓前 又不載丘丹詩 桃抄疑之 故辨之 綱目集覽第一 不官於朝 而居家者 曰处士 王維 盛唐 新唐書百廿七 文藝傳【廿(二十)】

10 村云 日本ノ亭【云ハ 柱四本立タル鉢ハカリ 唐ニハ大屋ヲモ 亭ト云フ 林亭モ 处士カイツモ居ルト見ヘタソ【「唐」見セ消、右傍に「官」。「大官屋」にすべき】

11 才子傳 王維字摩詰 太原人 云々 開元十九年 狀元及第 擢左拾遺 迁【給事中】 賊陷【兩京】 駕出幸 維扈

12 從不【レ】及 為【レ】所【レ】擒 服【レ】藥称【二瘡病】 【「二」 禄山愛【二其才】 逼【至】 【レ】洛陽 供【レ】旧職 拘【二於普施寺】 賊宴【二凝碧池 悉召【二梨園諸工【二 合【レ】樂 維痛悼 詩曰 萬戸傷心生【レ】野烟 百官何日 再朝【レ】天 秋槐花落空【二宮 裡 凝碧池頭奏【レ】管絃 時間【二】 【悼】 【詩】 間に「賦」とある。 【賦詩曰】にすべき】

13 行在所【二】 賊平後 授【レ】偽【二官 者皆定【レ】罪 独維得【レ】免 仕至【二尚書右丞【二】 云々 又云 王維別墅在【二藍田縣南【二】 輞川 亭【二】 館相望 嘗自寫其景物奇勝 日与文士丘丹裴迪崔興宗遊覽賦詩 琴樽自樂 後表 宅請以為寺 云々 才子傳第二

14 琴樽自樂 後表 宅請以為寺 云々 才子傳第二

15 琴樽自樂 後表 宅請以為寺 云々 才子傳第二

16 琴樽自樂 後表 宅請以為寺 云々 才子傳第二

17 琴樽自樂 後表 宅請以為寺 云々 才子傳第二

一三

- 1 緑樹 言林木森々 枝葉繁茂 盖処士■栖遲經年也 日厚言不着俗人之跡也 盖四隣 德不孤必有隣【■】「極」某字書きかけ、見せ消【遲】
- 2 三四句 言不朝天子 則不冠巾 不媚俗士 則不敬礼 不正坐也 故起坐随意而已 此篇言奔走紫陌紅
- 3 塵之間 被冠帶縛者 処士白眼眇【】 厭冠帶縛者 在科頭二字 厭奔走者 在箕踞二字也 王維有祿山偽
- 4 署之【】 然非維本志矣 自尔無心仕官 故惹処士 惹ハ羨平【尔（爾）】
- 5 白眼 他字本集作君字 言世人憎君也 如此則敗【二】崔氏之義【二】也 崔氏未出 誰惡之哉 然則作君字【非】也 伯弼作他字 妙也
- 6 一義 白眼 看他 世上 人ノ点ハ 他ノ世上人白眼ニシテ 看此人也 不可也
- 8 科頭 後漢書寶為傳曰魁頭 注 魁 科也 科 穴也 猶如日本縮也 養按 後漢書列傳目錄無寶為
- 9 名 不審 科頭 後漢書列傳七十五東夷傳曰 韓有三種 一曰馬韓 二曰辰韓 三曰弁辰 馬韓在西 有【科頭】 右上に書き入れ「養按【二】
- 10 五十四国 其北与楽浪 南与倭接 辰韓在東 弁辰在辰韓之南 其南亦与倭接 云々 馬韓人云々 不知曉
- 11 拜 無長幼男女之別 不貴金寶錦罽 不知騎乘牛馬 唯重環珠 以綴衣為飾 及縣頭垂耳 大率皆
- 12 魁頭 露紛 註 魁頭猶科頭也 謂以髮髻繞成科結也

紛音計 盖不分明 重可正 養心如此

- 13 桃云 科頭ハ ヲウワラハヲ 云ソ 科ハ稻ヲ ミダス也 桃講史記時云尔
- 14 旧抄云 其■髻形似科斗 々々 蝌斗也 字与科通 科虫名 蛙子也【■】「髮」見せ消【】
- 15 養按 史記列傳第十張儀傳 張儀 說韓王曰 秦帶甲百餘万 車千乘 騎万匹 虎賁之士跼跼科頭 注
- 16 跼跼音徒俱 跳躍也 又云 徧拳一足曰■跼跼 科頭 謂不著兜鍪入敵 索隱曰 跼又音勅 貫・願奮【二】「跼」間に挿入符あり、「跼」右傍に転倒符ある。「跼跼」にすべき【飲（敵）】
- 17 戟者 至【レ】不【レ】可【二】勝計【二】 注 言執戟奮怒而入陣也 索隱曰 兩手捧頤而直入敵 言其勇也
- 18 桃云 注 兜鍪ハ カフトン
- 19 魁頭 猶科頭也 謂以髮髻繞成科結也 管寧曰 吾嘗朝科頭 三晨晏記 又史南越王尉佗傳有之
- 20 箕踞 漢書列傳二 張耳傳曰 高祖箕踞罵詈甚 慢【レ】之 師古曰 箕踞者 謂申【二】両脚【二】 其形如箕也
- 21 唐子西箕踞軒記云 箕踞者 山間之客 拳腰聳肩 抱膝而危坐 偃僕踞縮 其圖如箕 故古人謂【一客】右傍に【容】
- 22 之箕踞 便於賦詩 於閱書 便於長口 其勢如蹲猿 云々【閱】左傍に書き入れ指示あり、「類聚 作読【二】「口」左傍に書き入れ指示あり、「同上 作嘯【二】「肅*欠」(嘯)

23 幻按 王維集 上下六卷 大德甲辰 彭適所刻也 題号曰

須溪先生校本唐王右丞集 云々 第四卷与盧員

一三

1 外象過崔処士興宗林亭 緑樹云々 白眼看他一作君世上

人 須溪批云 謂口本ノ字 闕 白眼亦如鐘會於嵇康

2 幻調 晋書 嵇康傳 穎川鐘會 貴公子也 精練有才

辯 故往故往造焉 康不為礼 而鍛不輟 良久會

3 去 康曰 何所聞而來 何所見而去 會曰 聞レ所

「レ」聞而來 見所見而去 會以此憾「レ」之 及是言「二」於

文帝「一」曰 嵇康卧

4 竜 而不「レ」可「レ」起 公無憂天下 顧以康為慮耳

【龍】「而」間に「也」。「卧竜也」にすべき

5 幻考 杜詩 第四 九日藍田崔氏莊詩 老去悲「レ」秋強

自寛 興來今日尽「二」君歡「一」 云々 又崔氏東山草堂詩

6 結句云 何為「西」莊王 給事 柴門空閑 鎖「レ」松筠

鶴曰 王給事王維也 云々 幻謂 崔氏乃崔興宗乎 然

7 則 盖四隣 意指王維西莊乎 落句有自愧仕官之心也

8 詩家鼎鑪 或本

9 葉紹翁詩 應嫌屐齒印蒼苔 十度敲門九不開 春色滿園

10 閑不得 一枝紅杏出牆來

東坡寄宝廬云 滿園秋色濃欲滴 老僧倚杖青松側 何事

高口喚不應 噴余踏破蒼苔色 【破】見せ消 【口】士

11 事文類聚前集三十二 唐子西箕踞軒記曰——之容——

便於讀 便於長嘯——如蹲猿 如投竿而漁者

12 盖長松之下 灘石上 放然不拘礼法者所為也

13 雪本日 案 晋書 列傳十九嵇康傳云 初 康居貧 与向

秀共鍛於大樹下 以自贍給 鐘口貴公子也 精練【口】山

乃【會】

14 有才辯 故往造焉 康不為之礼 而鍛不輟 良久會去——

為慮耳 又崔興宗和云 穷巷空林常閑閑【窮】窮】

15 悠々独卧与前山 今朝忽枉嵇生駕 倒屣開門遥解 盖以

批与和可解本詩也 又盧象詩云 映竹時 【解】「盖」間

16 插入符あり、右傍に「顔」。「遥解顔」にすべき

□轉轆轤—— 老儒 盖此亭詩也 并見可也 歟 右

雪本【口】「米」耳【聞】

17 和云 松筠為侶石為隣 水繞幽地絶塵 好鳥一声春夢醒

朗吟天地一閑人【幽】地「間」に插入符あり、右傍に「亭」。

「幽亭」にすべき

18 張繼 字懿孫 襄州人 天宝十二礼部侍郎楊浚下及第

与皇甫冉有舊年之故 契逾崑玉 早振「レ」詞名 初來長

安 頗矜氣節 有感【こ】より以降は次の「楓橋夜泊」詩

19 的抄文が続く【氣（気）】

懷詩云 調与時人背 心将静者論 終年帝城裡 不識五

侯門 嘗佐鎮戎軍幕府 又為塩鐵判官 大曆間 入内侍

20 仕終檢

校祠部郎中 繼傳覽有識 好談論 知治體 亦嘗領郡

輒有政声 詩情爽激 多金玉音 盖其累代詞伯 積襲弓

【傳】（傳）

21 裘 其於為文 不雕自飾 丰姿清迥 有道者風 集一卷

今傳

丰 豐満也

22 子 ■居折切 遺也 餘也 後也 短也 无右臂也 ■
某字墨消し】【无（無）】

一三三

1 雪本云 廬熊 蘇州府志六云 楓橋去「レ」閭門七里

豹隱記談云 旧作「レ」封橋 王郇公居「レ」吳時 書「二」

張繼詩「二」刻「レ」石作楓字 【この行まで「楓橋夜泊」

原典テキストが置かれている】

2 相承至「レ」今 天平寺藏經多「二」唐人書「二」 背有

「二」封橋常住四字「二」朱印 知府吳潛至「レ」寺 賦「レ」

詩云 借問封橋々畔人 筆史

3 言「レ」之 潜不肯改 信有拠也 翁逢竜亦有詩 且云

寺有藏經 題至和三年 曹文乃寫 施「二」封橋寺「二」

作「レ」楓者非 熊嘗

4 見佛書 曹氏所寫 益可信矣 又楓注 橋通魯般塘 同

四十三云 寒山禪寺去「レ」城西四十里 旧名「二」普明禪

院「二」在

5 楓橋 人或称为楓橋寺 郇 至倫切

6 蘇州 々府誌曰 橋楓寺在楓橋 故呼之 實寒山寺禪也

【「二」橋間に挿入符あり、「楓」右傍に転倒符ある。「楓

橋寺」にすべき】【實（実）】

7 淵講云 楓橋蘇州也 昔入唐時 親遊其地也 橋乃石橋

不大者也 楓 ■樹今已無之 唯有名存耳 寒山禪寺 寒

山【■「橋」見せ消】

一三四

1 拾得之所遊也 佛殿之後 有堂 々中央安寒拾木像 佛

殿上間高掛鐘 是所謂半夜鐘也 佛殿裡上間【「掛鐘」、

「鐘」左傍書き入れ、「梭敵頭の立 ■ 置鐘」とある。■

「迺」某字墨汚れ見せ消、右傍に「透」。「■」「置」間に

挿入符あり、右傍に「响誰那立方」。「梭敵頭の立透响誰那

立方」にすべき】

2 非可掛鐘之處 而掛之 盖名鐘之謂乎

3 淵云 泊船処ハ 楊子江ヲ ホリツクル也 故云江楓

又姑蘇城ト 寒山寺トノアハイハ 七八町ハカリ也 清水

与五橋第之間ホト也【「与」「五」間に挿入符あり、「第」

右傍に転倒符ある。「第五橋」にすべき】

4 南禪本地御影 月心久居楓橋寺 々甚小 寺前有店 扁

江村

5 淵又云 余入唐時 蘇州姑蘇城前留舟六日矣 蘇州ハ

今モ 唐土一二番ノ富貴ノ國也 城外ノ河ニ 十万廿万艘

【富（富）】

6 ハカリノ畫船アリ 皆諸国ノ商賈也 陸亦有二三万人也

官妓傾城不知幾百人也 管弦歌舞昼夜サカイ【畫（画）】

7 ナシ

8 村云 漁火モ チロチロトシテ 夜アケカタ也

9 此詩古今解者不一也 天隱註ノ心ハ 曉鐘ヲ撞後 夜猶

ヲ長ヲ云也 月落烏啼霜滿天 夜已欲曙 然後愁眠

- 10 不□ 与漁火相對シテ 待トモ待トモ 夜ワ マダ不曙
ホトニ サテワ 前刻寒山寺ニ ツイタ鐘ワ 非□二曉鐘
【二也】 夜半鐘【□「孰火(熟)」
- 11 ニテ アルケナソ 鐘ツキカ 誤テ ツイタ歟 是活語
也 姑蘇——ト 其 在処ヲ 念頃ニ 挙ハ 鐘ヲ トカ
メテ 憤發シテ云也
- 12 蘭云 藏子安和之 夜泊「レ」楓橋五夜天 潮平風静未
「レ」成「レ」眠 一声 漁笛汀「□」散 水満「□」星河「□」月
満「レ」船 張櫓亦和【□「火*回」(烟)】
- 13 云 曉星残月随「レ」江天 鴻鴈驚「レ」人夜不「レ」眠
云々 然則言□二曉鐘□二也 嚴張皆本于天隱註 可也
補亦同天隱注也
- 14 補云 在唐僧云 寒山寺前有殿 ヲ前有水 多魚 漁人
終夜釣之 此詩所謂者実也
- 15 慈氏義云 張繼在寥落境 夜永不寐以對漁火 故謂月モ
落鳥啼霜亦滿天 夜モ已可曙 於是初聞
- 16 半夜 然則今夜不可曙乎 杜詩 秋天不肯明之謂也 愁
眠 小眠也 不眠之心也 東漸 如晦同此義【「夜」「然」
間に挿入符あり、右傍に「鐘」。「半夜鐘」にすべき】
- 17 如心義云 張繼本淫於色 故泊楓橋与妓同卧 妓欲奔於
他人之家 偽告曰 月落鳥啼霜滿天 夜已明矣【「如心」
右傍書き入れ「侍者 耆旧而死」】
- 18 漁人亦不釣魚 空燒火休息也 妓乃請暇 繼許「レ」之
妓去後 初聞夜半鐘 繼噬臍耳 三四句言 惜「レ」別也
凡天下人懷機巧 如此妓 故感之作也
- 19 一元和尚曰 凡張繼自賦此詩後 吳楚之俗泊船於津 与
妓寢時 妓已欲去 吟一二句 以請「レ」暇 夫亦唱 三四
句以惜別也【「一元和尚」左傍書き入れ「初□□度唐人ソ」。
□□二字破損か】
- 20 竹云 不「レ」留「レ」之時ハ 明朝又向江頭別 月落潮平
是去時 ナント云句ヲ 吟スルト云ソ 是「一元義」卜雪
21 樵義也 「一元義」實夜半 鐘「鐘」墨汚れ見せ消「鐘」
右傍に転倒符ある。「夜半鐘」にすべき】
- 一三五
- 1 觀中 管見抄云 或曰本集与官妓約 而官妓為他人奪去
故此詩有愁「レ」思如此賦也 未考本集 是以辨其虚實也
【「觀中」右傍書き入れ「相国普廣院御影 与絶海同入唐」】
【虚(虚)】
- 2 按太猶集 孫元實楓橋夜泊詩云 畫船夜泊寒山寺 不
「レ」信江楓有客愁 二八蛾眉双鳳管 滿天
- 3 明月按凉州 然則如心 觀中義 亦有擬乎 蕉堅之時
有楓橋夜泊之題 嚴仲詩云 月落姑蘇城【「嚴仲」左傍書
き入れ「嚴嚴仲 大智院僧 月翁之師」】
- 4 外天 孤篷霜白宿江烟 寒山鐘似与愁約 不到官船到客
船 盖本於孫元實詩也
- 5 竹云 嚴仲詩与天隱註異也 与如心侍者義同矣 与觀中
義同矣
- 6 默云 夜半鐘實夜半也 月落——七日八日之夜 月亦當
半夜而落也 月夜鳥啼者 魏武帝詩 月明星稀

- 7 鳥鵲□南之謂乎 霜滿天云々 東坡赤壁賦曰 白露橫江
水光接天云者 露欲降之候也 霜滿天 言夜【「鵲」□】
間に挿入符あり、「南」右傍に転倒符ある。「鳥鵲南□」に
すべき【□「飛」(飛)】
- 8 半冷氣逼身 霜欲降而未降 其氣滿天也 崔魯華清宮詩
云 銀河漾々月輝々 樓礙【二】天邊織女機【一】【边(辺)】
横玉叫【レ】雲清似【レ】水 滿空霜逐一声飛 言霜未降而
其氣滿空時 吹玉笛 則滿空霜和之飛也 然則霜滿
10 天 非曉 而半夜也 張繼不寐 且對漁火 於是初聞夜
半鐘 客懷不可忍者也【「夜半鐘」左傍書き入れ「實夜半
也」】
- 11 詩学大成 行脚僧部 鳥啼月落夜将半 且听楓橋寺裡鐘
是亦實半夜也
- 12 張繼再到楓橋詩云 白髮重一夢中 青山不改旧時容 鳥
啼月落寒山寺 欹枕猶聽半夜鐘 蕉雪【「重」二】間に挿
入符あり、右傍に「来」ある。「重来一夢中」にすべき【「聽
(聽)」】
- 13 由此詩解夜半鐘也 盖實夜半也 蕉雪為曉 統翠同天隱
注 古今抄此詩者夥矣 拔尤者嚮
- 14 所謂四義也 其餘不足取也
- 15 村講云 楓橋詩雖義多 天隱注可取也 統翠 聽雨亦同
天隱也 恕侍者 義 或惟肖義 或義堂 義 又或說二云
【「也」「恕」間に挿入符あり、右傍に「中」。「中恕侍者」
にすべき】
- 16 フ 儒者道士續キ句ノ義 皆不用之也 又絶海出題之時
- 敵仲作楓橋夜泊図詩 似用觀中義也 觀中義云々見于ノ
前【「義」「皆」間に挿入符あり、右傍に「有之」。「義有之」
にすべき】
- 17 漁菴点云 月落。鳥啼。霜滿。【レ】天 言以為夜已明矣
則今撞夜半鐘也 信仲点云 夜半。鐘声到客船 義与註同
18 曉風抄云 霜滿。天 言霜滿之天也 非霜滿于天也 露
結成霜 寒威滿地也 故注云 落月鳥啼霜滿 乃欲曙之
【「云」「落」間に挿入符あり、「月」右傍に転倒符ある。「月
落鳥啼」にすべき】
- 19 候也 雲雨雪雹 可云滿天也 霜則不可云滿天也 第二
句 言終夜不眠 及曙而對【二】江楓边焼残之漁火 俄睡
20 思生矣 倦勞可焉 第三四句 言曙色困眠之中 聽寒山
曙鐘 半眠半醒 以為夜半鐘 實非夜半鐘也
- 21 真竜岩竹居 宿楓橋次張繼韻云 朔風刮地雪漫天 屋角
風口撼夜眠 客口難禁鷄歲迫 江村又買武林舩【「居」【「宿」
間に挿入符あり、左傍に「集」。「竹居集」にすべき】【「刮」
左傍書き入れ「古猶切 削也 應也 刊」】
- 一三六
- 1 剪灯新話 聯芳樓記 製蘇臺竹枝曲十章 其第四云 門
泊東吳万里舩 鳥啼月落水如烟 寒山寺裏
2 鐘鼓早 漁火江楓惱客眠 事文類聚前集三十五題
作楓橋寺 城外作臺下 夜半作半夜
3 詩林萬選 清新体 又夜半作半夜 又漁火作父 百川学
海庚四 光考之

- 4 歐陽文集一百二十八 詩話云 詩人貪求好句 而理有不通 亦語病也 云々 唐人有云 姑蘇臺下寒山寺 半夜鐘到客船 說者亦云 句則佳矣 其如三更不是打一作／撞鐘時 云々【鐘】「到」間に挿入符あり、右傍に「声」。
- 5 〔鐘声〕にすべき】
- 6 漁隱叢話前集二十三曰 王直方詩話云 欧公言 姑蘇城外寒山寺 半夜鐘声到客船之句 說者云【「漁隱」右上書さ入れ「雪本」】
- 7 句則佳也 其如三更不是撞鐘時 余觀于鵠送宮人入道詩云 定知別往宮中伴 遥聽■絳山【■「維」見せ消】
- 8 半夜鐘 而白樂天亦云 新秋松影下 半夜鐘声後 豈唐人多用此語也 儼非遞相沿□ 恐必有【□「童+衣」(襲)】
- 9 說耳 溫庭筠詩亦云 悠然逆旅頻回首 無復松窓半夜鐘 庭筠詩多續在白樂天詩後 同曰
- 10 石林詩話云 此唐張繼題姑蘇城西楓橋寺詩也 欧公嘗病其半夜非打鐘時 盖未嘗至吳中寺 實夜
- 11 半打鐘 繼詩三十餘篇 余家有之 往々多佳句 詩眼云 欧公以夜半鐘声到客船為語病 南史載
- 12 齊武帝景陽樓有三更五更鐘 丘仲孚讀書 以中宵鐘為限 阮景仲為吳興守 禁半夜鐘
- 13 至唐 詩人于鵠白樂天溫庭筠尤多「レ」言之 今佛宮一夜鳴鈴 謂之定夜鐘 不知唐人所謂半夜鐘【「鈴」「謂」間に挿入符あり、右傍に「俗」。「俗謂之」】
- 14 者 景陽三更鐘邪 今之定夜鐘邪 然於義皆無害 文忠偶不考耳 学林新編云 世疑半夜非
- 15 声鐘時 某案 南史文学傳 丘仲孚 吳興烏程人 少好學讀書 常以中宵鐘鳴為限 然則半
- 16 夜鐘 固有之矣 丘仲孚與興人 而庭筠言姑蘇城外寺則半夜鐘乃吳中旧事也 私云 以上皆淵閣
- 17 和云 夜泊楓橋五夜天 潮平風静未成眠 一声漁笛汀烟散 水滿星河月滿船 刊刻 魯考
- 18 養按 勝覽 常州毗陵 無薦福寺并紅梅閣 又同十八 饒州部 不載薦福寺紅梅閣 盖勝覽有異本 有增損【「寺」「紅」間に挿入符あり、右傍に「并」。「不載薦福寺并紅梅閣」にすべき】
- 19 養所見之本 無此事迹 又他日重考之 則雷襄薦福碑之事 載之於饒州部【裏(蘿)】
- 一三七
- 1 范式 字臣卿 少游太学 与張劭為友 並告帰 式曰 後二年當還【「范式」右傍に「式 排句如此」】【范(範)】 【この頁は白紙頁に貼り紙したもので、別筆のように見える】
- 2 過■尊親 見孺子焉 乃共刻期日 至期 劭曰母 殺鶏炊黍【■「様」某字見せ消、右傍に「殺」。本行冒頭に「殺」ハ拱手也】とある】
- 3 待之 母曰 二年之別 千里結言 何相信之審 曰巨卿信士 必不失
- 4 期 至其日 果到 々陳平子亦同在学 病將終 謂其妻曰 山

5 范巨卿 烈士也 可以託 死既終 式為營護妻兒 身自送喪

6 於臨湘 東漢人 為荊州刺史 排勻

一三八【空白】

一三九

1 殷亮 新唐書并才子傳不載亮傳 戴叔倫新唐書

列傳六十八 載戴叔倫傳【戴叔倫】右傍に「中唐 養謂遂霸乎」とある【この行まで「贈殷亮」原典テキストが置かれている】

2 才子傳 叔倫字幼公 潤州金壇人 云々 吏部尚書劉公

与【二】祠部員外張繼【一】書 傳訪選材 日揖客賓 叔倫【員】【揖】「客」間に挿入符あり、「賓」右傍に転倒符ある。「日揖賓客」にすべき【劉】

3 投刺 一見称心 遂就薦 累遷撫州刺史 政議龔黃 民

樂其治 園扉寂然 鞠為茂草 詔書褒美 封

4 譙郡男 加金紫 後迁容管經略 威名益振 治亦清明

仁恕多方 所至称最 德宗賦中和節詩遣使者

5 寵賜 世以為榮 還 上表請為道士 未幾卒 叔倫初以

淮汴寇乱 魚肉【二】江上【一】 携親族避【レ】地来【二】

鄱陽【一】 隸業【士】 右傍に某字ある【

6 勤苦 志樂清虛 閉門却掃 与处士張衆甫素厚 范張之期 曾不虛月 詩興悠遠 每作驚人 有述藁【甫】「素」間に挿入符あり、右傍に「朱放」。「朱放素厚」にすべき【

7 十卷 今傳于世 才子傳第五

8 幻謂 鄱陽 饒州六縣一也 見勝覽 旧抄 叔倫為饒州

刺史卒 又饒州薦福寺紅梅閣下有宅 云々 風抄梅

9 謂 叔倫無為饒州刺史之事 按方輿勝覽并翰林墨全書等

饒州無紅梅閣 庚溪詩話 毗陵薦福寺【庚溪詩話】右

傍より書き入れ【玉屑九卷引之 饒州】とある【

10 紅梅閣程致道詩云 春風如酒 着【レ】物々不知 云

々 又詩話總龜云 蜀州郡固有紅梅數株 云々 盖非饒州

也【醉】見せ消、右傍に「醉」。「春風如醉」にすべき【

11 迹】とある【 太明一統志十一 鎮江府隋開皇中置潤州 云々 人物

戴叔倫金壇人 能詩賦 守撫州刺史 作均水法 俗便利

之 詔【太（大）】

12 書褒美 封譙縣男 加金紫 後迁容管經略使 綏徠夷落

威名流聞 德宗嘗賦中和節詩寵之

13 同五十四 撫州府名官戴叔倫撫州刺史 作均水法 耕餉

歲廣 民阜化成 遠近咸被其惠 人為立遺愛碑

14 同五十 饒州府流寓 戴叔倫潤州人 仕唐歷撫州容管

所至称治 後於饒州東湖下居三十年 刺史馬載本如此ノ恐戴

平

一四〇

1 慕其詩 為築隄湖上 時往訪之 有宅今為薦福寺【有

宅】右傍より書き入れ【与天隱注同】とある【

- 2 按 大明「統志」饒州府有薦福寺無紅梅閣 又常州府毗陵有紅梅閣無薦福寺 并叔倫事迹
- 3 蒲室与友人書云 唐詩人戴叔倫以宅為饒之薦福寺 至今祠祭如初 云々
- 4 日々 叔倫初欲為道士 不果 饒州薦福寺紅梅閣下有旧宅 寄題此詩也 此篇興也 見流水驚歲月速也
- 5 蘭云 首樓敵波斯匿王觀恒河水 魯論 子在川上曰 逝者如「レ」斯夫 不「レ」捨「二」晝一夜「一」 蓋見水有感者 儒佛皆然「首樓敵」右傍書き入れ「見于末 一之上」
- 6 「魯論」右傍書き入れ「子罕篇」「逝者」右傍書き入れ「指人年」「斯」右傍書き入れ「指水」「晝(昼)」
- 7 桃抄 或云 水雖焔海 我不焔故郷 故多感也 第二句 拳春与秋 而夏与冬在其中也 淵云 東坡泛潁詩 我性喜臨水 得潁意甚奇 到官十日來 九日河之湄 云々 須溪批云 知之者得其哀愁 不知者以為豁
- 8 達 此詩亦有此意 盖叔倫不遂功名之志 西漂西泊 豈無感哉 又不能焔山中 故居荒廢 出處違心也者「西」右傍に「東」「廢(寔)」
- 9 共字叔倫与殷亮歟 又叔倫与世人歟 或云 此詩亦事曹王在湖湘時作也 故有得販之嘆「与殷亮歟」左傍に「幻謂」此意可也「」
- 10 注 九辨曰 悲哉秋之為氣也 王逸註曰 寒氣聊戾 歲將暮也 逸又曰 序曰 九辨者 楚大夫宋玉之所作也
- 11 辨者 變也 九者 陽之数也 道之網紀也 謂陳說道德以變說君也 宋玉 屈原弟子 閔惜其師忠而放逐
- 12 故作九辨 以述其志也 見于文選第三十三卷 騷部 養考之
- 13 紅梅閣 「統志」第十 常州府 宮室部 紅梅閣注云 在玄妙觀 宋致道詩 春風如醇酒 物著物不知 居然北枝後 迨此白日遲 云々「致」右傍に「程」某字がある。「程致道」にすべきか「酒」「物」間に挿入符あり、「著」右傍に転倒符ある。「著物物不知」にすべき
- 14 雪云 日々——以下二句 言我与殷亮曾約休官去 未遂其期 故臨水以嘆日月易流也 盖孔子逝者如斯 夫 不舍捨晝夜之意也 山中云々以下二句 言叔倫旧宅 雖在薦福寺 紅梅閣下 而來往湖湘之間「某字書きかけ、見せ消」
- 15 与殷亮共白頭也 歎也【歎(嘆)】
- 16 和云 霜落山穴碧水流 青々松柏晚含秋 古今亦有南樓月 近竟無人到上頭 刊刻「蘭」某字書きかけ、見せ消「六」右傍に「空」
- 17 養謂 見「二」水流、「二」起「レ」歎、一義也 一義ニ無水不東流 水ハ 行タイ処ヘ行ク 我ハ不「レ」尔 故起「レ」歎 一義ニハ 日月推移コトハ 如「二」水流、「二」ソ前波後波流
- 18 去ル如ク サルホトニ 春ハ 成「レ」夏々 成「レ」秋ソ 此二義ヲ 取合シテ 見テ ヨイソ ナセニ 見「二」水流、「二」起「レ」歎、ソト云ニ 年月、ノ移ルヲ 傷ム故也 年月移去
- 19 コトハ 不「レ」舍「二」晝夜、「二」流ル、如ク ソツソ

— 72 —

- 黄尚帶酸 張嘉甫曰 盧橘 何種果類 荅曰 枇杷【荅
(荅)】
是矣 又問 何以驗之 荅曰 事見相如賦 嘉甫曰 盧
橘夏熟 黄柑橙棣 枇杷燃而蘭柿 亭奈厚朴 盧橘果枇杷 則
【奈(奈)】
賦不【レ】應【二四句重用【一】 應劭注曰 伊尹書曰
箕山之東 青馬之所 有盧橘常夏熟 不據依之 何也 東
坡笑曰
意不【欲耳 朴 五臣作【レ】樸 步角切 此應劭義
選上林賦善注也 養謂 此義ハ 枇杷デハナイト
云心ソ【一】「不」見せ消【一】
9 養按 事文類聚後集二十七 枇杷部曰 冬華實黄 大如
雞子 小者如杏 味甜酢 廣志 又曰 盧橘夏熟【類(類)】
【華(華)】【雞(雞)】
10 或云 即枇杷 上林賦 又引坡句曰 盧橘楊梅次第
新
11 養按 文選第八 司馬相如上林賦 盧橘夏熟 黄甘橙
直/更棲湊 枇杷燃而蘭柿 □亭奈厚朴五臣作樸/步角切 云々
注 善曰 應【□】「木*亭」
12 曰枇杷似斛樹長 劭曰 伊尹書曰 箕山之東 青鳥之所
有盧橘夏熟 注晋灼曰 盧黑也 郭璞曰 黄■甘 橘
【■】「柑」見せ消【一】
13 属 棲亦橘之類也 張揖曰 棲小橘也 說文曰 橙■属
也 張揖曰 枇杷似斛樹 長葉 子如杏 郭璞曰 燃々
支【■】「橘」墨汚れ、右下に「橘」。「橙 橘属也」にすべ
き【一】
14 木也 音煙 張揖曰 楊梅其實似穀而有核 其味酢 出
江南 銑曰 皆果木名 夏熟 謂當夏而熟也
15 養案 史記列傳五十七司馬相如傳曰 於是乎 盧橘夏熟
注 郭璞曰 今蜀中有給客橙 似橘而非 若柚
16 而芬香 冬夏華實相繼 或如彈丸 或如拳 通歲食之
即盧橘也 索隱曰 應劭云 伊尹書曰 果之美者 箕
17 山之東 青馬所有 盧橘夏熟 晋灼曰 此雖賦上林 傳
引異方珍奇 不係於一也 案廣州記云 盧橘【珍(珍)】
18 皮厚 大小如甘 酢多 九月結實 正赤 明年二月更青
黑孰 吳錄云 建安有橘 冬月樹上覆裹 明年夏【孰(孰)】
右下に「熟乎」【裹(裹)】
19 色变青黑 其味甚甘美 盧即黑色是也 養按 此傳無
枇杷字注
20 張勃吳錄以為建安郡中有橘 冬月於樹上覆裹之 至明年
春夏 色变青黑 味尤絶■美 以為相如所引盧橘 盧黑色
也 盖近是乎 劉勰 翟九 魯考之 【■】「味」見せ消【一】
21 養按 東坡詩二十三卷 真覺院有【二】洛花【一】々々時不
【レ】暇【レ】往 四月十八与【二】劉景文【一】同 往 賞【二】
枇杷【一】 魏花非老伴 盧橘 是【二】「魏花」より右傍に「私
云 八句詩第三四句」とある【一】
22 鄉人師談助云 盧橘 枇杷也 楊雄賦 盧橘熟
同第十五卷 贈惠山僧惠表 客来茶罷空 無【レ】有
23 盧橘楊梅尚帶酸 次公曰 上林賦曰 盧橘云々 唐子西
作李氏

24 山園記言 園中盧橘為特盛 私云 八句詩之末句
25 同十卷 南村諸楊北村盧 注 謂楊■梅橘也 又廣州記 盧橘皮厚云々【■「梅」見せ消】

一四三

1 日々——而今類齡迫【二】於衰耄【二】 形色枯悴 精神昏昧 髮白面皺 逮將【レ】不【レ】久 大王汝年幾時見【二】河水【二】 王曰

2 我生三歲 慈母携【レ】我謁【二】耆婆天【二】 經過此流三歲時見十三歲時見 乃至六十二見 亦無【レ】有【レ】異 仙言 汝今自

3 傷【二】不 髮白面皺【二】 觀【二】河之見 有【二】童耄【二】 【二】不 王言 不也 世尊

4 盧橘——桃云 ハナタチハナノ時ハ 言ハ 春來 盧橘ノ花 開カト 思ヘハ イツノマニヤラ 秋ニナリテ 楓葉衰也 ハナタチハナハ 春

5 開花也 又 盧橘ハ 枇杷ト云時ハ 十月十二月ニ花サイテ 夏五六月ニ 実力 熟也 言ハ 枇杷花開時ハ ハヤ 楓ハ 衰也 今年

6 秋亦過也 此義可敗村義/同之 春ヲ云ワハ 盧橘ヨリモ面白花可多ソ 只楓葉衰時ニ 盧橘ハ 開ホトニ【云々】夕

7 村講 盧橘楓葉処々雖有也 以楚之產為本也 漁隱後集十六 羅隱詩 暖氣潛催次第春 梅花已謝

8 杏花新 蘭云 誠齋詩 老子今朝偶然出 李花全

落杏花開之法也

9 或云 一句盧橘喻小人在位 楓葉喻君子失時 二句言吾欲退也 三四句 喻君□之不再回也 盖君恩蒙【□】□+心【恩】

10 他小人 而不蒙君子也

11 聽雨云 水向【二】吾所【二】望流 盖愁之所極 欲【下】付【二】流水【二】寄【中】此情【上】 則水亦不【二】為吾留【二】也 不【二】少住【二】 況久住乎 以【二】無情水【二】

12 為【二】有情【二】 是詩家活法也

13 村云 華夷遠シテ 山水隔レハ 門ヲ出テモ トコカラ京ヲ望マンソ 如此京ノコイシイ時 沅湘ハ我ヲ打棄テ京ノ方ヘ流

14 去テ 不留ハ ナサケナイソ 村又云 第一句ハ 中興法/照詩 凌霄花落鳳仙開之句法也

15 盧橘——此篇言叔倫在【二】湘南【二】 見【二】盧橘開 丹楓衰【二】 驚【二】歲月推移【二】 不【レ】覺出【レ】門望【二】京師【二】 々々悠遠 不【レ】可【レ】望 當【二】此時【二】 沅湘隨【レ】意流 去 可【レ】恨可【レ】恙羨乎

16 杜詩 清渭無情極 愁時獨向東之意也 趙子昂絕句云 橘子花開香四隣 綠陰如染淨塵無 幽齋

17 獨坐鳥声樂 萬累不干心地春【塵】「無」間に挿入倒符あり、右傍に転倒符あり、「無塵」にすべき 宋之問詩曰 冬花掃盧橘 夏果摘梅楊 注 才子傳

18 不載事曹王之事【摘「梅」間に挿入符あり、「楊」右傍

に転倒符ある。「摘楊梅」にすべき」

19 張檣和湘南即事詩云 芦葉蘋花幾盛衰 独怜万里別京師

日 斜帆影江南路 消尽離情是此時

20 出門何処——勝覽二十三(如寰宇記引關駟十三州記云 西

自湘江 至東萊萬里 故曰長沙 有定王臺 俗傳 定

21 王載米 博「二」長安土「一」 築臺于此 以望「二」其母

唐姬墓「一」 張安國名定王臺 自為書扁 補云 叔倫此句

暗用也乎 「安國」右傍に「孝祥」

22 沅湘——注 秦少游——村講 續翠云 叔倫此詩末句ハ

ハヤ説尽也 少游詞ハ 涵蓄シテ 不説尽ホトニ 尚深

シテ マシタ

一四四

1 又三體八句ニ 巫峽啼猿數行淚 衡陽飯鴈幾封書ト云モ

ハヤ説尽也 其句ヲ 元朝ニ 改テ 風雅集 衡陽鴈

【峽(峽)】

2 斷三千里 巫峽啼猿十二峯ト作ル 涵蓄シテ 不言処面

白キ也

3 雪本 盧橘——以下二句 言我謫湘南未得暇 故日々出

門以望京師也 第一句言時節也 錢起辛夷花尽杏花

4 飛 東坡木綿花落刺桐開 誠齋老子今朝偶然出 李花全

落杏花開之類

5 沅湘云々 以下二句 言沅湘日夜向東流去 故欲付吾愁

不少 ■住也 杜詩 清渭無情極 愁時正向東 反用之

【■「佳」某字見せ消】

6 也 又鼎鑪馮可迂所思詩云 雁自飛々水自流 西風不寄

小銀鉤 意同也

7 晁元忠西販詩云 水從樓前來 中有美人淚 韓子倉取其

意 以代葛亞卿作詩云 君住江濱起畫樓

8 妾居海角送潮頭 潮中有妾相思淚 流到樓前更不流 唐

孫叔白有經照應溫泉詩云 一道泉

9 回繞御溝 先皇曾向此中遊 雖然水是無情物 也到宮前

咽不流 子蒼末句 又用孫語也 復齋漫錄

10 和云 澤國天寒蒲柳衰 五湖処々着漁師 孤舟此日東販

去 正及尊師秋美時 如此 雪本

11 京師 公羊傳 京者何大也 師者何衆也 天子之居 必

以衆大之辭之辭言之 集覽

12 韓翃字君平 南陽人 天寶十二載 楊紘榜進士 候希逸

素重其才 至是表佐淄口幕府 罷 閑居十年 及李勉在宣

武復辟之 德宗「一」右傍に「淄青 処名」二「口右傍に

「青」三「ここより一四四15まで次の「送齊山人」作者につ

いての抄文が続く】

13 時 制詰闕人 中書兩進除目 御筆不點 再請之 批曰

与韓翃時有同姓名者 為江淮刺史 宰相請孰与 上復批

曰 春城無処不飛花

14 韓翃也 俄以駕部郎中制詰 終中書舍人 翃工詩 興致

繁富 如芙蓉出水 一篇一詠 朝士環之 比諷深 云々

15 於文房 筋節成於茂政 當時當盛稱焉 有詩集五卷 於

世「卷」於「間」に挿入符あり、右傍に「行」。「行於世」

にすべき】

一四五

1 齊山人 齊 一義姓也 一義山名也 非歟 本集云

送齊山人販長白山 々々々在南 村本如此 幻曰 未考出
 処【この行まで】送齋山人「原典テキストが置かれている」

2 本草 七曰 茵陳蒿 云々 面白悦長年 白兔食之仙

面白悦

3 旧事 事字語助也 楚辞体也 聽雨云 儒者必欺佛老
 是常也 此詩亦然 言白兔公已為「レ」旧事 其人骨

【「常」「也」間に挿入符あり、右傍に「住」。「是常住也」
 にすべき】

4 朽矣 而 換掉「レ」頭帰「二」來人間「二」 今又乗「レ」
 風去 有何奇特 依旧山自山 水自水 故云 柴門——云々

5 掉頭 東漸云 不称意兒 蘭云 太白点旧事 仙人——直
 指「二」此人「二」 為「二」白兔公「二」 盖五言八句 昔事

李輕車句法也
 6 幻謂 旧事点 山谷詩 旧事刘子政 憔悴口王城句法也
 此義不可也【口「業*」】(鄭)

7 淵講云 師兄江西云 白兔公ハ仙人先祖也 猶如吾宗有
 達磨也 言釈迦達磨 奉公也 旧事ノ点也 白兔公門客

8 齊山人嫌「二」寂寞「二」而出「レ」山 今又入「レ」山也 帰
 去ハ 出「二」山中「二」也 又乗「レ」風今「二」入山中「二」
 也 一句含種々之心 又有此句法乎

9 昌黎云欲行未行

是三意也

10 村云 昔 仙人白兔公ト同ト云ハ 不可也 事ノ字ハ

師、事也 心華ニ 物ヲ習タト云ヘハ ユカシイ也 仙人
 乗風者 猶達磨乗【某字書きかけ、見せ消】

11 芦也 或云 白兔公比「二」齊山人之師「二」也 師「二」其
 道「二」 則豈在「レ」時而已哉 吾宗事佛 亦此也

12 補講云 齊今師、事「二」昔白兔公「二」 何哉 白兔公仙
 人也 長生シテ 今日モアルヘキソ 此義可也 注 常乗

白兔往來人間「二」トアル

13 ホトニ 一ノ句ニ 白兔公ト云内ニ 昔ハ 在山中シカ
 今ハ 人間ヘ出タト 云心アル也 二句 掉「レ」頭自

「二」山中「二」 帰、去「二」于人間「二」也
 14 又自「二」人間「二」乗「レ」風入「二」山中「二」也 山中何
 処ソト云ヘハ 一路寒山柴門流水也 續翠ハ 此詩ヲ 中

断ト見ル也 自山中乗風掉
 15 頭來于人間也 三四句 今又販山也 如此見ルホトニ
 中断詩ニナリテ フルイソ 漁菴云 乘風天上ヘヤラン

行ホトニ 柴門

一四六

1 流水ノ面白処ハ イタツラニアルソ 此義不可也

2 養謂 齊山人 齊ハ 姓也 山ニ ヒツコウテ イルホ
 トニ 山人ト云ソ 又義ハ 齊ハ 山ノ名也 齊山ニイタ
 人也 此義非也

3 同 韓翃傳 見才子傳四 翃字君平 南陽人 天宝十三
 載 楊絳榜進士

- 4 本草ニ 白兔公ハ 茵陳シシ藥ヲ服シテ 得「レ」仙ヲ アル
ソ 太白点 旧事 仙人——事ハ ツケ字也
- 5 幻曰 旧■劉子政 憔悴鄴王城ト云タト 同ソ 旧ノト
云心也 旧事 仙人——ハ 此齊山人ハ 仙道ヲ 修シテ
殊勝也 旧ノ白兔
- 6 公ニ チカワヌソ 【■「事」見せ消、右傍に「時」。「旧
時」にすべき】
- 7 第二句 掉頭販去又乗風 云心ハ 中山ニ ヒツコウテ
イタカ イヤト云テ 掉「レ」頭 山中出テ 人間販去
然ル【「中山」、「山」字右上に転倒符あり、「山中」にす
べき】
- 8 カ 又人間モ イヤト 云テ 乗風 長白山 販ルソ ア
ルクトテモ 乗物モ イラヌソ 乗「レ」風 行クソ 白
兔公ト云内
- 9 ニ 人間ニ 出タト 云心アリ 乗「レ」白兔 往「来」二
人間【「一」ト云ホトニ 人間ニ出タ心ヲ含也 或時ハ
山中 或時ハ 人間ニ 出ソ
山中人間ソ 一致ニ 見タソ 雪本 此全篇言 齊山
人如旧日白兔公 往來人間 然今以不適其情 帰去也 縦
雖帰隠 豈
- 11 別有佳処耶 依旧山是山 水是而已 盖凡儒家者 為仙
釈而作詩 則有犯之 故云 仙人白兔公也【「是」「而」間
に挿入符あり、左傍に「水」。「水是水而已」にすべき】
- 12 注 莊子 在有篇 疏曰 鴻蒙元氣也 雀躍 跳躍也
寓言也
- 13 村云 三四句言 抑下齊山人也 巧妙ニ云テ 掉頭 イ
ヌルトモ 山中ハ 指タル事ハ アルマイ 一路寒山柴門
流水ニテ コソ アラン
- 14 スラン 依旧サヒキル也 儒者謗仙人也 一義云 俗塵
不到処 別有天地也 李白詩 桃花流水杳然去 別有天地
非
- 15 人間之意也 村講用両義 村又云 又乗風 如旧ニ乗風
又販山中也 三四句言 塵世朝暮变迁 山中長依然也
幻按 三体五言八句 許渾詩 楚翁秦塞住 昔事李輕車
或昔事二字 或作往事 義恐非平 文選三十一 范
龍彦劬古詩 昔事「二」前軍 幕「一」今逐「二」嫖姚兵
「一」■ 向曰 李廣為前將軍 霍去病為嫖姚校尉也 事逐
皆【「龍」右上に挿入符あり、「彦」右傍に転倒符ある。「彦
龍」にすべき】【■「同」某字見せ消】
- 18 從行也 又按 韋蘇州集第五 逢楊開府詩 少
「二」武皇帝「一」無頼恃恩私 又見才子傳 事「二」【「少」
「武」間に挿入符あり、「事」右上に転倒符ある。「少事武
皇帝」にすべき】
- 19 淵明詩 彭祖愛永年 掉頭不可住
- 20 続三体詩 張仲萃 廉子祐 帰金陵詩云 帰舟捻是傷情処
一路殘山剩水中 又陳 萃題画詩 悔殺當年誤出【殘】殘【
21 山 知音不遇抱琴還 帰來旧院依然在 去孤雲野鶴閑
皆出此詩之摹也 雪本【「去」「孤」間に挿入符あり、右傍
に「伴」。「去伴孤雲」にすべき】
- 22 和云 栖山遁世鹿皮公 帰去憑虛駕曉風 東入崑崙山下

過 海風孤鶴月明中

一四七

- 1 元史君 慈氏和尚謂之元積 村菴云 元積未曾之楚 以元史君為元 何哉 養按 オ子傳第六卷 有元積傳 而无「元」「何」間に挿入符あり、右傍に「積」。「以元史君為元積」にすべき【この行まで「送元史君自楚移越」原典テキストが置かれてゐる】
- 2 守■楚移越之事 元史君守楚而有能政之譽 今亦移越也 唐音遺響 元作王 郡作道【■「越」見せ消】
- 3 露冕 去「冠飾」令「下」其顔「見」見「レ」上之也 此人守「レ」楚 能治「其」國「故」為「レ」令「知」有德「人」見「其」面「也」 淵云 天子垂十二旒 為不見細事也 太守不然 露冕示德於民也 冕 礼之冠也
- 5 後漢書列傳十六 郭賀 字喬卿云々 拜荊州刺史 引見賞賜 恩寵隆異 及到官 有殊政 百姓便之歌曰 厥德仁明郭喬卿 忠正朝廷上下平 顯宗巡狩 到南陽 特見嗟歎 賜以三公之服 黼黻冕旒 勅「行部」去「レ」 使百姓見其容服 以章有德 云々 養按 郭賀附蔡茂傳 養按云 檐帷本傳無注
- 8 注 去檐 云々 韻會 檐蚩古切 說文 衣蔽前 又檐 楡謂帷檐 以蔽前後 又檐字註 車檐謂之裳幃 詩曰「詩」左傍に「氓篇」
- 9 漸車帷裳 周礼 巾車有容蓋 注 鄭司農云 容謂檐車

山東謂之裳幃 或曰童容 以幃障車旁【「漸」左傍に「ウ」ルラス】

10 如裳為容飾 其上有蓋 四旁垂而下 謂之檐 幻謂 檐与檐通乎 村云 檐 車ノフ、イン

11 莊子在宥篇曰 雲將東遊 過扶遙之枝 而適遭鴻蒙 々々方將「拊」 髀 爵躍而遊「象」 象曰 雲將主將也 鴻蒙光

12 氣也 扶搖木神 生東海也 亦云 風遭遇也 拊拍也 雀躍 跳躍也 寓言也 夫氣是生物之元也 雲將為雨澤之本也

一四八

1 本是春陽之鄉 東為仁惠之方 鴻蒙拊「髀」 爵躍 掉「頭」曰 吾 弗「知」 々々 疏 掉「頭」不「レ」答

2 杜詩批点第三 巢文掉「頭」不「肯住」 東將「三」來入「海」隨「烟霧」 養按 ■注引莊子在宥篇 無掉頭者 於事

3 不可之狀之註 希曰 淵明詩 彭祖愛永年 掉頭不可住 雪本 劉長卿和顏使君登潤州城樓 山城迢「高」樓 露冕吹鏡上々頭 玉漏無之 連敗「布」

5 幻謂 露冕行春 或用楚故事 謂為楚太守乎 荊劬乃楚也 臨淮 陰亦近乎【劬（州）】

6 後漢書列傳二十三 鄭弘字巨君 會稽山陰人也 云々 弘少為鄉嗇夫 太守第五倫行春 見而深奇也 召署督

7 郵 奉孝廉 云々 注 太守常以春行〔二〕所〔レ〕主縣
〔二〕 勸農桑振救之絶 見續漢志也 弘 為騶令 注 騶
令 亮州

8 縣也 政有仁 惠民称蘇息迁淮陰太守 注 謝承書曰
弘 消息繇賦 政不煩苛 行春大旱 隨車致

9 雨 白鹿方道 俠穀而行 弘怪問主簿黃國曰 鹿為吉為
凶 国拜賀曰 聞三公車輻畫作鹿 明府必為

10 宰相 私云已上注文也 養按 鄭弘傳 傳文無弘行春之
事 注引謝承書有弘行春之事 又傳之本文唯有第五

11 倫行春之字 又弘傳之次有周章傳 曰章從太守行春 云
々 無註

12 養按 郭賀傳 有露冕之意 無露冕字

13 行春 行 下耿切 覽察巡視也 札記 月令 巡行縣鄙
之義也 今以行字為平声 故詩人例用之 蘇平仲文集〔二〕行

14 春 右傍書き入れ指示あり、一四八12「上声梗韻」とある
十五題張會稽扇詩云 鑑湖波暖欲生烟 守太行春放画舩

皂盖朱幡穿柳去 傍人指点是神仙〔一〕守 右上に挿入符
あり、〔太〕右傍に転倒符ある。〔太守〕にすべき

15 行春 通鑑十一云 行 下孟反 循行也

16 続空云 此詩每句使故事 サレトモ コセメカスシテ
スラリトシテ面白キ詩也〔一〕セ〔メ〕間右傍に〔リ〕あり、

17 補云 此詩雖〔レ〕可〔二〕入用事体〔二〕 使事不為事使也
養按 月令 孟夏之月 口令〔二〕司徒〔一〕巡〔二〕行〔二〕縣

鄙〔二〕 命〔レ〕農勉〔レ〕作毋〔レ〕休 于都〔二〕

陳 注行去声

19 行春 見于札記月令 巡視郡中農務之事 見民貪富 以
与農器也 能者賞之 惡者罰之 行字 此時兩音

20 去声上声 通也 慈氏又云 行春之行 雖去声 今之所
〔レ〕用声律 似〔二〕平声〔一〕 如何

21 淵云 行春 訓為巡 則去声也 然雖今平声用〔レ〕之
訓為往也〔一〕也 然 間に挿入符あり、〔雖〕右傍に転倒

符ある。〔然今雖〕にすべき

22 史記 高祖記 乃使〔レ〕人 与 〔二〕秦 吏 〔一〕 行 〔二〕
縣鄉邑 〔一〕 告諭之 通鑑第九 漢紀有之 胡三省註

行下孟翻

23 幻按 歐陽脩文集十一卷 律詩部 詠雪詩云 至日陽初
復 豐年瑞遽臻 云々 應須待和暖 載酒共行春 盖欧

一四九
1 陽亦以行春之行為平声 又戴石屏詩集第三 藁 五言律
真州上官漕勸農云 小隊出行春 旌旗野雲 是 〔旗〕

〔野〕間に挿入符あり、右傍に〔帶〕。〔旌旗帶野雲〕にす
べき

2 亦行字為平声 又范文正公別集第一 寄題溪口廣慈院詩
若得會稽藏拙去 白雲処亦行春 又 〔雲〕 〔処〕 間に挿

入指示あり、一四九に〔深〕とある。〔白雲深处〕にすべ
き

3 蒲室 湘水春行図詩 湘江何処間幽栖 野服行春曉色微
又勝覽 他州部 湯文圭贈池州張守詩 〔水〕 〔春〕 間に

- 挿入符あり、「行」右上に転倒符ある。「湘水行春」にすべき」
- 4 絳幘夜坐窮三史 紅旆行春到九峰
- 5 又白氏文集二十八 早春雪後贈洛陽李長官長水鄭明府二同年詩云 府庭共賀三川雪 縣分道行「縣」「分」間に挿入符あり、「道」右傍に転倒符ある。「縣道分行」にすべき」
- 6 百里春 此皆以行春之行為平声也 又翰墨全書乙集十一朱慶餘嶺南路詩 連年不見雪 到
- 7 処即行春 盖律詩平
- 8 又 張楷 埽田園第七 海边行春詩云 行尽東南汗漫濱要將斯道属斯人 盖行為往之義歟
- 9 第二句言楚人懷「二」其德「一」 欲相「随移」越 楚人者 野民也 野民猶如此 況君子敬之 可知矣「楚（野）」
- 10 野人 論語先進篇 子曰 先進於礼樂野人也 後進於礼条君子也
- 11 懷惠 又里仁篇 子曰 君子懷「レ」德孔曰懷安也 小人懷土孔曰重「レ」也 迂 君子懷「レ」刑 孔曰安「レ」於法 少人懷「レ」惠 包曰 惠「レ」恩惠也「「二」」「也」間に挿入符あり、「迂」右傍に転倒符ある。「重「レ」迂也」にすべき」
- 12 欲移家 信仲云 暗用郊人慕大王而移岐山之意也
- 13 東風 陰 淮 許子 說文 水之南為「レ」陰 水之北為陽縣在淮水之南 故曰淮陰也「風」「陰」間に挿入符あり、「淮」右傍に転倒符ある。「淮陰」にすべき」
- 14 村云 言元君守楚之日 如邵公聽民訟於棠樹下 能施仁政也 故今元君去楚移「二」之後 百「二」慕「二」其「二」棠「一」
- 「水」見せ消「一」移「二」、右傍に「越」。「移越」にすべき」「百「二」、「姓」墨汚れ、右傍に「姓」。「百姓」にすべき」
- 15 德「二」唯留「二」一株甘棠「一」 以「二」為「二」元君遺愛「二」也 惟字有恨意 又云 能ヲ立テ、作ル詩也 淮陰部ト云、フタゴナル字
- 16 ノ上ニ 東風二月トヤワヤワトシタル字ヲ添へ 甘棠ト云字ヲ ヤワラケテ 棠梨ト改用ユ 是妙処也 作者
- 17 可著眼也 梅云 二月字盖春秋經云 春王正月之義也非「十月寒字」文「寒」「字」間に挿入符あり、「文」右傍に転倒符ある。「文字」にすべき」
- 18 金符旌節維揚道 要看西湖十里花「二」幻謂「露」三字見せ消」
- 19 劉商 才子傳第四 劉商字子夏 徐州彭城人 擢進士第貞元中 累官比部員外郎 改虞部員外郎 云々「商（商）」
- 20 仍工畫山水樹石 初吳郡張瓌 後自造真 云々 有集十卷 今傳武元衡序之云
- 21 吳興 夏文彦士良所纂圖繪寶鑑卷第二 唐部 劉商為郎中 性格高邁 愛畫松石人物
- 22 初師張瓌 後自造真 為意 有觀奕圖石刻行于世
- 一五〇
- 1 去櫓 鈞會曰 漸日帷裳 王也 按毛詩第三 衛 淇隰訓詁 傳第五 氓 刺「レ」時也 衛宣公之時 礼儀消

- 亡 淫風大^レ行 男女無^レ別 云々【日】右傍に「車」。
「漸車帷裳」にすべき】
- 2 詩曰 桑之落^ニ矣 其^ニ黄^ニ而隕^ニ自^ニ我^ニ徂^ニ爾^ニ 三^ニ歲^ニ食^ニ貧^ニ 淇水湯々 漸^ニ「二車帷裳」^一 傳曰 隕^ニ情也 湯々 水盛兒 帷裳 婦人之車 飾也
- 3 箋曰 帷裳 童容也 我乃渡^ニ「二深水」^一 至^ニ「レ」漸^ニ「二車童容」^一 猶冒^ニ「二此難」^一而往 又明^ニ「二己專」^一「二心於女」^一
- 4 竹枝詞【こより次の「竹枝詞」についての抄文が続くが、「竹枝詞」原典テキストが一五〇六と一五〇七の間に置かれている】
- 5 夜郎竹節 々々 勝覽 販引部載^{〔抄〕}販集詩云 驚心鳥石蓮花淖 過眼黄牛竹節灘 征棹從中海過 好山只【「棹」
「從」間に挿入符あり、右傍に「直」。「征棹直從」にすべき】【「海」右傍に某字】
- 6 得片時看 中興吟鑑上之ニ 王十朋黄牛峽絶句云 白騎黄牛竹節灘 々々佐々幾峯峦 云々 帳中香枝詞注【に詳之】【「哥」字左傍にヒ、右傍に「奇」。「奇々」にすべき】【「香」枝間に挿入符あり、右傍に「竹」。「香竹枝詞注」にすべき】
- 7 竹枝詞 季昌註曰 本楚聲 夜郎竹節 夜郎見後妙集内 又東坡忠州竹枝歌叙云 竹枝歌本楚聲
- 8 幽然惻怛 若有所深悲者 豈亦往昔之所見 有足怨者歟 夫傷^ニ二妃而哀屈原 思懷王而憐項羽 此亦楚人【「怛」
右傍書き入れ指示あり、「玉蘭」丁割反／悲也】【「怛」怛】
- 9 之意相傳而然者 亦詳見後 劉禹錫竹枝詞
- 10 竹枝詞 或曰 簪^ニ「二竹枝」^一以歌也 理未然也 言^ニ二妃恋舜揮泪染竹 以此為根本 而作^ニ「二婦思」^一「レ」夫之歌^ニ「二也」^一而歌妓所歌者也
- 11 補云 擊竹枝合音律歌之 此義可也 一義云 祭神時燒^ニ「二竹枝」^一 非也 又鎌倉所謂麥搗歌也 類非也【「歌」也間に挿入符あり、「類」右傍に転倒符ある。「麥搗歌類也 非也」にすべき】
- 12 注 竹節 言擊竹調【「音節」也 非【四言】「竹有^ニ「二上下節」^一也】
- 13 山谷云 余婦既作竹枝詞三疊 世傳之否 予細憶集中無有 請三誦乃得之 一声望帝花片飛 万里明妃雪【「山谷云」右上に書き入れ「雪本」】【「詞」三間に挿入符あり、右傍に「云々 谷十二」。「竹枝詞云々 谷十二 三疊」にすべき】
- 14 打困 馬上胡兒那解聽 琵琶應道不如歸
- 15 又羅鄴聞子規詩云 蜀魄千年尚怨誰 声声啼血向花枝 滿山明月東風夜 正是愁人不寐時
- 一五一
- 1 李涉 才子傳第五 涉洛陽人 渤之仲兄也 自号^ニ「レ」清溪子 早歲客^ニ「レ」梁園 數逢^ニ「二乱兵」^一 避地南來 樂^ニ「二佳山水」^一 卜隱匡
- 2 廬香炉峰下石洞間 云々 後徙居^ニ「レ」終南 偶從陳許辟 命 從事行軍 未幾 以罪謫^ニ「二夷陵宰」^一 十年踰蹬峽

中

3 病瘡成痼 自傷羈逐 頭顱又復如許 後遇赦得還 賦詩
云 荷衰不是人間事 帰去滄江有釣舟 遂放船來重「船」
「來」間に挿入符あり、「重」右傍に転倒符ある。「放船重
來」にすべき

4 訪吳楚旧遊 云々 踏蹬玉漏 無能也 又不能行

5 此詩中建溪實在何処 一義建溪在鼎州 茶所産之建溪
也 在武陵之外千里之遠也 【州】「茶」間に挿入符あり、
右傍に「非」。「非茶所産」にすべき

6 或云 建溪在夷陵 夷武地相接也 村講云 李涉カ
謫処ナレハ 夷陵ニコソ アルラウ 【武】後にヒとあ
り、右傍に「陵」。「夷陵」にすべき

7 十二峰 楚襄王与【二】宋玉【一】遊【二】雲夢【一】望
【二】高唐之婦觀 【一】上有【二】雲氣【一】王 曰 昔

先王遊高唐 昼寝 夢一 婦人曰 妾巫

8 山之女也 朝為行雲 暮為行雨 朝々暮々 陽臺之
下 云々

9 十二 一義 觀中曰 十二峯乃婦 所在也 空舲灘乃夫
所在也

10 泣向云々 十二峰与空舲灘相近 不知夫之所在 来此而
猶思在武陵 婦泣以向建溪 意奇 盖末「レ」知【二】涉召

11 婦【一】猶為在【二】謫居【一】而憶【レ】之乎 雖然以東婦
字 見則不合也

12 空舲 大明一統志六十二 荊州府空舲峽在鼎州東三十里
夏秋水泛 必空舲乃上其灘 亦名空舲 云々

13 松云 十二峰ハ 雲雨高唐事ヲ思ヘハ タノ時タニ

アチナイ処ナルニ マシテ 月落ル曉ノコロ 一段旅愁ヲ

催也 ソレヲ ソレ【云】 右下に「舜徒」とある

14 ト云ヘハ 空舲灘上 子規ノ啼時分ナルホトニ 地獄

モスミカトテ 此ホト ウカリシ 建溪カ コイシウナル

15 李涉ハ 武陵

ヘコソ 被【レ】謫テ 居タレ 建溪 在【二】夷陵 【一】

ナリニ 如【レ】此ハ云ソ ナレハ 夷 武 地相接也 【

16 東婦 自【二】東方婦 歟 婦【二】于東方 【一】歟 幻謂
婦【二】于東方 【一】義 可也 才子傳 放船重来 誤吳楚

17 旧遊 登天台石橋 【誤】右傍に 【訪】

18 云々 盖自夷陵召還 東遊【二】吳楚【一】也
或云 此篇言感十二峯月 空舲灘子規 却恋建溪也 雖

19 桑下三宿 恋之者 誠人之情也 況經年寓居 可不恋乎
賈浪仙 【賈】右傍書き入れ 【島】

20 渡桑乾水詩云 客舍并州已十霜 飯心日夜憶咸陽 而今
又渡桑乾水 却指并州是故郷之同意也

21 月欲低 補云 欲【レ】低 ト東漸ノヨムハ非也 詩意
一義云 子規口不如婦 故雖喜今日召婦 平生謫処ヲ思

22 出也 賈島詩同意也 一義云餘ニ 今カナシイ処ヲ ト
ヲルホトニ 此間 イタシ 建溪ノ ウルサイ カナシイ
処ヲ 思出也 二義共 可也
注 武陵云々 武陵不在武夷山也 武陵夷陵トアリサウ

也 不審也

- 23 註 建溪在建寧府 云々 天隱註 似以武夷山為武陵夷陵
 恐非平 幻按 方輿勝覽十一 建安建州永安

一五一

- 1 □ 華ノ異耳 禹貢 楊州之域也 貢茶所出也 建寧府有武夷山 古記云 昔有神降于山 自称武夷君 後又名曰武夷 云々 又云 建溪源出武夷至城外 合東溪 又廿九卷 在峽州有四縣 夷陵其一也 三十卷 常德府有四縣 武【廿(二十)】
- 3 陵其一也 蓋峽州常德府皆禹貢荊州之域 而一面地也 才子傳云 李涉謫【二夷陵【二】 天隱註云 謫【二武陵【二】 其地相接 故云【レ】爾乎 夷陵、武陵、与【二建寧府建溪【二】相【去太【遠 天隱註 未審也 又按勝覽廿九卷 荊門軍有【二建水【二】 在郡北百里 蓋荊門 春秋時楚地 而与峽州接 滿中行壁記云 西接巴峽 扼其咽喉 東連鄆郢為之襟帶 由是觀之 此詩所謂建溪指【二荊門建水【二】平謂【二建水【二】為建溪【二】者 如勝覽十一所載 羅昭諫【勝覽】右傍に教文字が書き込まれ、小文字書きで判読できない】
- 7 詩 春灘建水狂云者 指【二建寧郡建溪【二】也 又祝和父四六云 建水上游 富沙名郡 是亦指建溪也 則然此詩【也】「則」間に挿入符あり、「然」右傍に転倒符ある。「然則」にすべき]

- 8 指【二建水【二】 云【二建溪【二】 又何害哉 幻又勝覽廿九峽州 隋改夷陵郡 唐改峽州 中興移治于紫陽山 云々 蓋紫【又】「勝」間に挿入符あり、右傍に「謂」。「幻又謂」にすべき【中興】右傍に「宋【隋(隋)】

- 9 陽山属建寧府 崇安朱晦菴所居也 然則峽州夷陵 其路転回 則地接建寧府 建溪乎 建寧者 閩越地也 閩蜀接峽變峽者 可知焉耶 養按 楊州之域而古閩越地
- 11 養謂 幻解之意 羅昭諫詩指【二建寧建溪【二】 則指【二荊門建【水【二】 亦曰【二建溪【二】 无【レ】害乎 然則此李涉詩 所【所】後に挿入符あり、右傍に「謂」。「所謂」にすべき【溪】見せ消【无(無)】
- 12 建溪是荊門 建水敗 紫陽山属建寧府崇安 則峽州、夷陵、建寧府、建溪、相接歟 云々 蓋此義尚可考正 未必然矣
- 14 村云 十二峰ノ地ツ、キニ 空舸灘アリ 二句共謂 難忍者也 三四之句ハ 言ハ 京ヘ ノホトニ 心モ ウレシカランスルニ ナセニ ヤラ【ホ】「ト」間に挿入符あり、右傍に「ルト」ある。「ノホルホト」にすべき]
- 15 泣ル、也 其故ハ 謫処ノ武陵ノ建溪ヲ サテモサテモト 思出タスモ 悲シクテ 泣【ル、也】「力」見せ消【又云 空舸灘ハ 空霧落ト云処ナレハ 偏ニ カナシイ
- 17 陸放翁三峽歌云 巫山見九峯 十二 船頭彩翠滿秋空 朝雲暮雨渾虛語 一 夜猿啼明月中【二云】「巫」間に挿入

符が二つあり、「十」と「二」右傍にそれぞれ転倒符ある。

「十二巫山見九峯」にすべき【「語」見せ消】

18 十二云々 雪本云 全篇言 李涉自貶處帰時 十二峯頭

落月之時 宿「二空舩灘」二 以聞「二子規」二 其声不堪情 故却憶貶處之建

19 溪也 賈島渡桑乾詩 客舍并州已十霜 帰心日夜憶咸陽

無端更渡桑乾水 却望并州是故郷之意

20 雪案 地志 空舩灘在夔州路 飯州秭飯縣東 絶崖壁立

飛鳥不能棲 有一火炬 挿石崖間 長数尺 相

21 傳 堯洪水時 行者泊舟 繫於崖側 故挿舩炬于此 至今猶日挿竈 方輿勝覽

22 杜鵑 一名 怨鳥 凡始鳴皆北響 啼苦則倒樹 說文

所謂 蜀王望帝化為子嚮 今謂之子規 是也

23 至今 寄巢生子 百鳥為哺其雛 尚如君臣云

24 和云 瀟湘南望翠雲低 日落君山鳥夜啼 万里江湖名利客 愁随烟浪過蛮溪 刊刻

一五三

1 常 才子傳第四 寶常 字中行 叔向之子也 京兆人

大曆十四年 王儲榜及第 初歴従事 累官水都員外郎

【儲】右傍に某字ある【この行まで「香山館聴子規」原

典テキストが置かれている】

2 連除閨變江撫四州刺史 後入為國子祭酒而終 養又按

才子傳曰 常 兄弟五人 聯芳比藻 詞價藹

然 法度風流 相距不遠 云々 後人集所著詩 通一百

3

首為五卷 名寶氏聯珠集 謂若五星然 云々

4 楚塞 餘春乃暮春也 李白惜春賦之意也 言南國子規啼

早 而暮春則已不聞之 皆向北方移之

5 謂也 然宋治平中 邵雍与客散步天津橋上 聞杜鵑声

慘然不樂 客問其故 則曰洛陽旧無杜鵑 今

6 始至 有所主 客曰 何也 先生曰 不二年 上用南士

為相 多引南人專務「レ」變 更「レ」天下 自此多

「レ」事矣 客曰 聞杜鵑

7 何以知「レ」此 先生曰 天下將「レ」治 地氣自「レ」北

而南 將乱 自南而北 今南方地氣至矣 禽鳥飛類得氣之

先

8 者也 云々 果如其言也 由觀之是 暮春則南國不可聞

杜鵑也「由」「觀」間に挿入符あり、「是」右傍に転倒符

ある。「由是觀之」にすべき】

9 彷彿 詞會 說文 若似也 廣勻 髣髴 或作佛 彷彿

亦作佛 楊雄甘泉付 仿佛其若夢 注即髣髴也 班固西ハ

引彷彿 注猶梗□也【□「既」木」(概)】

10 又作□ 前郊祀歌相放□ 注師古曰 猶髣髴 又作方弗

【□「弗」心」】

直乎 私云 梗一 硬

一五四

1 續翠講云 他所ハ 二三月ノ末 杜鵑猶啼トク 南方ハ

暖ホトニ ハヤ不啼也 雖然 寶常力 旅人ニテ 知

【「二」夜今宿「二」此【「知」「夜」間に挿入符あり、「今」右

知

知

知

知

知

知

知

知

傍に転倒符ある。「知今夜」にすべき。「夜」左傍に「上」某字ある」

2 地「一」カナシカラセウトテ 猿カ 我カ 啼ヨリハ

子規カ 啼タラハ 猶カナシカラントテ 譲別愁テ ヤト

ウテ 啼セタソ 断字

3 断続也 ナイツ ナカナンツ シタ心也 彷彿字ハ一之句 聴字ヲ云也 末ノ彷彿字 声字ナクハ 聴字可惡ソ

声字 彷彿

4 佛字 アレハコソ 聴字 不慮也 雲埋——昼夜不断

啼処也 鳥ハ 一処ニテ 啼テ ヤカテ ソハヘ 迂テ

啼也 言ハ 一度今

5 啼トモ 千声啼テ 飛タシニ 相似也 ナリニナレハ

猿カ 今夜ハ 譲テ 子規ニ 啼セタホトニ トリワケ

カナシイソ 彷彿ハ

6 ソツト、云心也 一字カ マカウ也 千声ニ アマタタ

ヒニ ナイシニ 彷彿タリ 後鳥羽時 西行法師歌 ナカ

ストモ コハ「イ」右傍に「キ歟」

7 ラセニセン ホト、キス 山田ノハラノ 梶ノムラタチ

ノ心也 千声ニシテ 一度飛ニ 彷彿タリ 三ノ句ハ

手ヲ ツケス 四、句ヲ

8 喚タ 千声ノ一度ニ 飛ニ 彷彿タリ

9 松翁云 譲字 只道「下」今夕猿不啼 而鵲啼 則猿譲

「中」其啼於杜鵑「上」之意マテハ 意太浅矣 言 楚地巴

山間テハ 沾旅人衣者 莫似猿 雖然 猿ニ コシテ

一重ノ人ヲ 泣カスル 子規カ アルホトニ 猿ハ イマ

ケヲミテ シサツタ

11 今夕以子規為主也 然則催客淚者 子規優於猿 遠也

12 断猿 漁菴云 断鴈乃断行鴈也 孤鴈也 断猿此類也

桃云 断猿ハ 聞猿 則人断腸也 或説云 昔有

13 猿 一夜哀叫而死 解之觀之 則其腸寸々断也 故曰

断猿 此説可有拠 未引考 搜神后記見千次

14 搜神后記 臨川東興有人 入山得猿子 婦 猿母後至其家

此人縛猿子於庭樹 其母搏頰 向人欲哀

15 乞 此人竟殺之 猿母悲喚 自擲而死 此人破腹視之 腸

皆断裂 養考之

16 淵云 断猿 断 東坡 吹断簷間積雨声也 又笛吹断類

也 猿声已断也 言不啼也

17 村云 断猿 乃猿死 寸々断腸也 孟東野詩集卷第三

聞砧詩 杜鵑声不哀 断猿啼不切

18 詩林万選十四 吳德輿舟行夜泊詩 今夜不知何処泊 断

猿晴月引弧舟 刘夢得再受連州

19 至衡陽贈別詩 帰目併随廻鴈盡 愁腸正遇断猿時 載于柳

刘四十一

20 刘後村集第一 報恩寺詩 城中客子聞鐘去 独立空山聽

断猿 断猿 幻謂 其義雖多 唯言断腸猿耳 考搜神記 則猿

腸断裂也 盖聽彼断腸声 則人亦断腸也 「神」右上に濁

点「。」らしいものが見える。「神」を「ジン」と読む意

か

22 張祐題戈陽館詩 葛溪漫□干将劍 却是猿声断客腸【□

【シ*九】(淬)

一五五

1 断猿註 漁隱後集二 復齋謾錄云 峽州記 行者歌曰

巴東三峽猿啼悲 猿啼三声淚沾衣 故古樂府

2 有巫峽長猿鳴 三声淚沾衣 陳蕭詮夜猿啼詩 別有三声

淚 沾裳竟不窮 杜子美詩 聽猿實下三【陳蕭詮】右傍

に【□本如此】とある【】

3 声淚 荅溪漁隱曰 古樂府 梁簡文巴東三峽歌云 巴東

三峽長 猿鳴三声淚沾裳 魯直竹枝註引【枝】右下に

【詞】。【竹枝詞】にすべき【】

4 此兩句為證 復齋所記 峽州行者歌 乃異韻而同詞 必

誤也

5 聽雨義 彷彿千声一度飛【二】 言似【二】千声許一度

連鳴飛【二】也

6 一義云 飛字ハ 鳴ノ義也 飛則鳴 ヲ則飛 此処ニ

一度鳴ハ 他所ニテ 千声鳴ニ 彷彿タリ 上ニ千声字ア

ルホトニ 飛字モ 鳴ノ義也

7 村云 聽漸稀ハ ハヤ啼スサム也 或云 初鳴時分也

ハツ子ヲ 云ソ 雲——コハニ 千声ハカリ 啼カト 思

ヘハ チャツト 一度タヒ 又サツト 飛ヒ迂也

8 村又云 雲埋——此雲深イ空山老樹之中ハ 杜鵑ノ 淵

ト 見ヘタリ 一度飛ヘトモ 千声モ啼ク 心チカ スル

也

9 彷彿——飛字 義多 或作鳴義 或為便韻 皆不穩 幻

謂 非鳴義 非便韻 唯謂飛去也 見杜鵑一飛 以為彷彿

10 千声 蓋雖不鳴 又似千声也 西行歌近之 杜甫子規詩

兩邊山木合 終日子規啼 眇々 春風見 蕭々 夜色凄

云々【某字見せ消、左傍に「啼」。「子規啼」にすべき】

11 風雅集 範約莊詩 燕山三月初三夜 聞得啼鵑第一声

風雅集作範約莊 韻多約 与葯同【集】右傍に【后二】。

【風雅集后二】にすべき【葯】(葉)

12 断猿 世說 恒公入蜀 至三峽中 部佐中有得猿子 其

母緣岸哀号 行數百里 遂上船便氣絕 規其腹腸 皆

【規】左傍に「規平」

13 寸々断 公聞之怒 命黜其人 三峽長百里 兩岸連山

重岩疊嶂 隱天蔽日 常有孤猿長嘯云々 雪本

14 雪本 雲埋——二句言 香山館乃樹老雲深 而子規宜啼

之地 故想聽千声 則一声鳴而飛 天英云 子規飛 則啼

故輩字【互(宜)】

15 啼之義也 或云 听稀之時 又鳴 故不勝情 今之一

声 當當時 千萬声也 雪本【當(当)】

16 雪本 楚塞云々二句 言南州地暖 春事早 故子規亦到

17 餘春啼 稍稍 然今夜乃啼 以欲濕人衣 於是断猿不声而

18 讓沾衣也 和云 啼得江南花漸稀 傷春行客每沾衣 不堪更卧西面

月 欹枕一声□□飛 和勻題改新春【二面】右傍に【窓】

【□□飛】は「魂夢飛」。「云鬼」(魂)、「已タ」(夢)

一五六

- 1 〇曰 興也 山者人君之象 而有「二」水色「二」者 宦官
 或女諸陰惡之小人 蔽「二」君之視听「二」耶 不然 将有
 「二」上僭之陰賊「二」耶 長慶者 年号也 〇「二」こより「長
 慶春」についての抄文が続くが、「長慶春」原典テキスト
 が一五六四と一五六五の間に置かれている」
 2 稱為臣者 方「二」君上有「二」レ「レ」惡 不「レ」得「二」敢斥
 「二」 只曰其年 則有「レ」所「レ」斥而無罪 是春秋之微而
 顯之筆 而詩之言「者無「レ」罪 听者足「二」以戒「二」之意
 也
 3 新愁者 豈止五臟之勞乎 重中「レ」酒而病也 所以
 「二」病「レ」「二」酒者 何「二」病自劇「二」飲 所以「二」劇飲「二」
 者 何憂「二」二皆事「二」也 病酒字最有味 公子无忌「二」皆
 (時)「二」
 4 諫魏王而不納 遂託酒昏晦 自茲不「レ」干「二」国事「二」
 病酒而卒 凝之所以「二」病「二」者 豈不同乎 怨而不
 「レ」怒 情見「二」于詩矣
 5 長慶春 古本 季昌註 長慶 穆宗年号 起元年辛丑
 止四年甲辰
 6 徐凝 才子傳 凝 睦州人 元和間 有詩名 方干師
 事「二」之「二」 与施肩吾同「レ」里 日親声調 無進取
 之意 交眷激勉 始「二」閉「二」について、一五六五に小文字
 書きで「閑胡旦反 垣也 闔也」とある」
 7 遊長安 不忍自銜鸞 竟不也名 將帰 以詩辭韓吏部云
 一生所遇惟元白 天下無人重布衣 欲別朱「二」銜「二」左傍
 に「カイ」、「鸞」左傍に「ウリ」
 8 門涙先尽 白頭遊子自身帰 知名憐之 遂帰旧隠 潜心
 詩酒 人間榮耀 徐山人不復貯齒頰中也 老
 9 病且貧 意泊無惱 優悠自終 集一卷 今傳 才子傳第
 六
 10 講曰 長慶 穆宗年号也 而徐凝所詠 昭宗時之乱也
 昭宗去「二」穆宗「二」而八代之後 而曰「二」長慶「二」者 言
 昭宗之
 11 乱 似昔之穆宗乱 故云尔 趙瞻民所注 專同此
 義也 以上說皆与余之所聞別也 徐凝元和十五
 12 年 与施肩吾遊長安 盖憲宗元和十五年之明年 乃穆宗
 之長慶元年也 然則言昭宗之乱者 非也 或云「二」憲宗「二」
 右傍書き入れ指示あり、「賢宗是歳 宦者陳弘志弒逆 其
 黨諱之 但言葉發」とある」【發(発)】【黨(党)】
 13 徐凝 咸通懿宗年号也 故云 以懿宗時乱 比穆宗長慶
 之乱 以作此詩也 古今詩人言「二」前代之事「二」 指當
 14 代「二」之例有之 雖然才子傳凝傳云 元和間有詩名 云
 々 又唐本所選「二」卷三牀詩之本 徐凝之名下 亦云
 15 元和中人 云々 然則凝乃穆宗長慶年中人 明矣 曰
 「二」昭宗時「二」 曰「二」懿宗時「二」 誤也 又蔵子安和三
 16 体此詩題改
 作新春 然則常所有之長慶春三字 損歟 又徐凝「レ」非
 「二」長慶中之人「二」乎 趙瞻民ハ 格ヲ 出シテ 解ヲシ
 タン 此字ヲ【趙瞻民】左傍に書き入れ「桃云」。「桃云
 趙瞻民ハ」にすべき」

一五七

- 1 見レハ 日本ノ文章也 可咲 此ハ 日本人カ 可「レ」取「レ」信トテ 号趙瞻民也 假名カキニ シタリトモ 義理タニ ヨクワ 可取ニ エコヲ
- 2 エヌ 字文ニ カイタニ ヨツテ 不用ソ 又一向ニ 取ルマイモ イワレヌ 好ヲハ 可取也 徐凝昭宗咸通中人ト云モ ユワレヌ 咸通ハ「字」「文」間に挿入符あり、「文」右傍に転倒符ある。「文字」にすべき
- 3 懿宗年号也 非昭宗也 又宋朝ニ 徐凝ト云詩人アリト云 此又未聞コト也 況与東坡山谷同時ト云事 ヲヤ可咲
- 4 統翠講云 題モ 不心得也 長慶年中所歌ノ 歌ニ 長慶春ト云曲アル歟 徐凝昭宗龍紀中人也 此詩 似歌
- 5 長慶春□ 故作之歟 不審 巖子安和新春云 雨潤風和柳帶烟 晴樓簫鼓慶新年 日斜好「□」「日*之」(時)【鼓(鼓)】
- 6 鳥花間語 喚得遊人醉欲眠 或云 命題以年号 則其詩必詠「二」時世之事「一」也 村義如此
- 7 統翠講云 注羸ハ ラウヒン也 此注ハ ワルイ 此辺ニ 病ニ 五アル也 詩ハ 言ハ 春ノ暖時 天地モ カスミテ 烟色如水也 此句 ソラ
- 8 クミハ 可面白也 如此時節ハ 面白ケレトモ 我ハ 遠客チャホトニ 無■興也 春ハ 新ニシテ 面白ク 我ハ 愁力 新ニ ナツテ【■】「客」某字書きかけ、見せ消「何事ニツケテモ 面白モナイ 仍字 五臓共ニト 云心也 日本ニ 読ハ、ツハケサマニト 云心也 ツハケナ

カラノ 義也 身上

- 10 字 不審也 五臓ハ 身ナレトモ コトアタラシク 云ソ 乱ノ不平ヲハ 酒与色ニテコソ 可「レ」慰ニ ソレハ 毒ト云テ 禁スルホ
- 11 トニ 美人ヲハ ソハニ ヲイテ 独眠也 花比君与美人也 言君臣夫婦一牀ニテ 可居ト 思タ者ハ ハナレハ ナレニテ サモナイ
- 12 ホトニ 述其事也 桂云 仍病「レ」酒ノ点モ アルソ 言山以比君 烟以比臣也 如水之烟竈山 盖穆宗微■弱臣凌君也 遠客凝自云也【■】「宗」見せ消
- 13 瞻民云 山頭水 易 蹇卦 象辞 山 上有水 蹇 注 山 上有「レ」水 蹇難之象 云々 乱之象也
- 14 或曰 易 師卦 坎下ノ坤上 象曰 地中有「レ」水師 幻謂 師卦 無用也 山頭水乱也 烟乱兆也 五臓 五常也 言五常道断
- 15 天下人皆如醉也 周易 蹇卦 尤可也 艮下ノ坎上 蹇 陰居上 陽居下 上下ノ位ノ逆也
- 16 梅云 一説 長慶元年辛丑作也 凝逢嶮阻艱難之時 故有新愁 或以易蹇卦 山上有水 為乱象 非也 只言 逢艱難險阻 反益自修之義也 或云 長慶四年甲辰作也 長慶四 穆宗晏駕 故有新愁 年「四」「穆」間に挿入符あり、末尾「年」右傍に転倒符ある。「長慶四年」にすべき
- 17 慈氏 日工集卅卷 山頭 水色 薄 竈 烟ト 点シテ 下ニ 竈色ト 云事ヲ 出ス也 太平廣記有竈色事【卅】(三

十七)

- 20 道砂ナントヲ 煎シテ 黒色ニ 染ソ ツラク 深黒ニ
セントテワ 入黒豆ソ 一入 染入ヲ 曰 簞色也
- 21 義堂曰 三四句 淵明採菊醉胡床 忘晋乱之類也
- 22 山頭水 魏志 鄧艾 字士載 初 艾當伐蜀 夢山上而
有流水 以問弥廣護軍爰邵 々曰 按易卦 山上有水

一五六

- 1 曰蹇 々 繇 不 東北 孔子曰 蹇利 西南 往 有 利 功也 不 利 東北 其道窮 也 往必克蜀 殆不還乎 艾撫然不樂 墨消し。
左傍に「利」「西南」「」とある。「繇利」「西南」「」にすべき「不」「東」間に挿入符あり、右傍に利「」。

- 2 養云 登艾將「レ」伐蜀ハ 三国ノ時ノ蜀ソ 山上有流水
ト云夢ソ 李邵ニ 夢ヲ 語レハ 曰 山上有水ハ 蹇卦
文也 乱也 登 鄧

- 3 又曰 利「レ」西南 不「レ」利「レ」東北 ト云ハ 艾心
得ズ 邵ニ問ヘハ 曰 艾將「レ」伐「レ」蜀ハ 蜀ハ當
「レ」伐也 而還ランコトハ 未可知之ト云ヘハ

- 4 艾掉頭ソ アシナルト云卦ノ故ニ 邵解如此歟 艾ハ
魏ノ將也

- 5 出曜經第八 海中众難甚多 水浪廻波 摩竭大魚 惡竜
羅刹 水色之山

- 6 長慶春 村云 長慶中ニ 臣カ ヲゴリテ 君ヲ 二人

- マテ 殺也 内官陳弘士弒憲宗 蘇佐明殺「二」穆宗子敬
宗「一」也「土」右傍に「口口志」「蘇佐明」右傍に「刘
克」「敬宗」右傍に「宝曆二年」

- 7 此詩 諷之也 山頭 春霞朦朧トシテ 眼前景雖佳
我是遠客ナレハ 有愁也 殊ニ 身上ニ 有五臟病

- 8 酒為崇ホトニ 酒ヲモ 不飲也 不飲酒之故ニ 桃花ハ
開トモ 面白也 一之句ハ ウラノ心ハ 言君弱臣強也
「モ」「面」間に挿入符あり、右傍に「不」。「面白也」
にすべき

- 9 古本 季昌註 五勞謂肝勞 心勞 脾勞 肺勞 腎勞
云々

- 10 注 陳無擇 幻按 鶴溪陳無擇 三因第八卷 五勞者
皆用意施為過傷五臟 使五神不寧 而為病 故曰五勞

- 11 以其尽「レ」力謀慮 則肝勞 曲運「レ」神機 則心勞
意外致「レ」思 則脾勞 預「レ」事 而憂 則肺勞 矜
持「二」志節「一」 則腎勞

- 12 是皆不量稟賦 臨差 遂傷五臟 以臟氣本有虛實 因其
虛實 而分寒熱 世醫例以傳尸骨蒸 為五「臨」「差」間
に挿入符あり、右傍に「事過」。「臨事過差」にすべき

- 13 劣者 非也 彼乃療疾 各一門 類 不可知 幻謂
天隱所引 只取意耳 某字見せ消「可」「知」
間に挿入符あり、右傍に「不」。「不可不知」にすべき

- 14 史記列十七 信陵君傳 魏公子無忌者 魏昭王少子 云
々 安釐王立 即位 封公子為信陵君云々 公子自知再
以毀廢 乃謝病不朝 与賓客為長夜飲 々 醉酒 多近

- 15 以毀廢 乃謝病不朝 与賓客為長夜飲 々 醉酒 多近

婦女 云々 竟病酒卒【■「為」見せ消】

16 上身——或云 今方天下乱 徐凝諫之 不可 故以酒色
欲早死 猶公子無忌也 天桃 女也 村云 此義非也 徐
凝【上】右上に挿入符あり、「身」右傍に転倒符ある。「身
上」にすべき】

17 ハ ソレホトニ ハタラカウス 分齊ナシ ヤウヤウ
元白カ列ニ 加ヘラルヘ也

18 仍【レ】病酒之点 言五臟勞因多飲 故厭酒也 仍病酒之
点 言五臟病之外 更以酒發病損身也

19 仍病酒 或云 仍字可味 朱静佳送李秋堂詩 相逢已恨
十年遲 買酒吳山一夜詩 明日送春

20 仍送酒 柳花風颺髮絲々
21 補云 窓下字可着眼 言天桃雖在目前 不見之 盖新
愁之謂也【■「梅」見せ消】

22 古本 季昌註 貞觀初 天下乂安 云々 心服其盛 甲
煎香 取大甲香 如崑崙耳者 酒煮蜜熬 入諸香用【因蜀
之

一五九

1 金吾 續翠云 此詩 毛詩 秦風風体也 毛詩ハ 車馬
衣裳人ノ兒ヲ云也 自昔秦十五國風ノ中ニテモ 驕也【こ

こより「宮詞」一首目についての抄文が続くが、その
原典テキストが一五九4と一五九25の間に置かれている】
沈香烟底下トモセスシテ 火底ト作ワ 何ソ 香ノ多イ
事ヲ ツヨク 云ヘシトテ 曰火底也 含諷刺之意也

3 古本 季昌註 戔林 秦中尉云々 顔師古曰 金吾 鳥

名 主辟不詳 天子出行 取主先導 備非常 故执此 象
鳥 以因名官 古今注【「古本」右上に「養考」【「鳥」「以」
間に挿入符あり、「因」右傍に転倒符ある。「因名以官」に
すべき】「取（職）」

4 難 難逐疫鬼也 為陰陽之氣 不【二】即【一】時退【二】 □
鬼隨而為【レ】人作【レ】禍 故天子使方相氏 黄金四目 蒙

【二】熊皮【二】 執戈【□「尸*方」(瘡)】【ここより「宮詞」
二首」一首目の原典テキストが置かれ、抄文がその枠線の
上方に書き込まれている】

5 揚楯 玄衣朱裳

6 只作難々之声 以殿
7 疫氣也 一年三

8 過為之 三月 八月
9 十二月 皇侃云 按三

10 難 二是難陰 一是
11 難陽 陰陽乃異 俱

12 是天子所【レ】命 春是
13 一年之始 弥畏灾害

14 故命【二】國民【二】 家々【悉】
15 難 八月難【レ】陽 々は

16 君法 臣民不可難君【「法」右傍に「象敷」】
17 故称天子乃難也 十二

18 月 難雖是陰 既非
19 一年之急 故民亦

- 20 不得同儼也
- 21 補云 注 微^二楯京師^一
- 22 毛^見蕭韻 微
- 23 々幸 覲^二非望^一 又求
- 24 也 抄也 嘯韻 微楯也
- 25 掠也 又諄韻 楯与^レ徇同 漢高祖紀 張良徇^二韓地^一 蘇^口 音巡 撫其民也 孟康曰 徇略也
- 一六〇
- 1 注月令——月令 季冬之月 云々 命^二有司^一 大儼 始於此者 陰氣^{右行}
- 2 云々 四司之氣 為厲鬼將隨^二強陰^一 出^レ 害^レ 人 旁礫於四方門 礫 攘也 云々 孔疏言 大者 以季春 唯國家之難 仲秋
- 3 唯天子之難 此則下及庶人 故言大難 旁桀者 旁謂四方之門 皆披礫^二其性^一 以禳除^二陰氣^一 云々
- 4 四司之氣者 熊氏引石氏星經云 司命二星在虛北 司祿二星在司命北 司危二星在司祿北 司中二星在司危北 史迂云 四司 鬼官之長 云々 出^二土牛^一 以送寒氣 注 作^レ土牛者 丑為^レ牛 々可牽^レ止者也 送^レ猶畢也 出猶作也
- 6 補云 注 振字 韻會 真韵 振之人切 振子 童男女 称 後鄧后記注 振之言 善也 善幼童也 補又云
- 7 此注 難司危北 讀也 師^二二振子堂^一 贈^レ大儼 如此可讀乎 不穩也 又堂字 恐當字乎 周志可考 幻謂 贈^レ大儼 如此讀之 亦可乎 大儼蓋指^二儼翁儼母相氏^一 又注 鼓吹署令 補云 四字可^二連誦^一
- 9 乎 又鼓吹署三字 可^二連誦^一 乎 幻謂 鼓吹署三字 連誦可也 柳文第一 鏡^レ歌吹曲 鼓云 嘗聞^二鼓吹^一 歌^レ吹^レ 間に挿入符あり、鼓^レ 右傍に転倒符ある。「鏡^レ歌吹曲」にすべき「吹^レ 見せ消」「鏡^レ」について、一六〇11に小文字書き「鏡 玉篇 似鈴 無舌」とある
- 10 署 有^二戎樂詞^一 独不^レ列^レ今 云々 署ハ 官居也 又方相氏 見周礼第八 盖儼以歐^レ疫^レ之官也
- 11 儼名 韻會 振字 漢 大儼 選中黃門子弟 年十歳以上 十二以下 百二十人 為赤幘皂製 執大鞞 玉
- 12 篇云 如鼓小而冇柄 補云 注戊夜ハ 戊刻也 上水ハ 漏刻也
- 13 金吾 村云 金吾ノ官カ 鬼ヤライヲスルン 今夜ハ 鬼ヤライアルト云テ ス、メマワルン
- 14 桂云 常忠云 儼ハ 鬼ヤライ也 鬼ヲ ヤライ 出心也
- 15 桃云 冬ハ 八隊ナレトモ 四隊ト云モ アルホトニ クルシカラヌン 補云 四隊ハ 一隊カ 六十人ツハ、也 四六廿四 二百四十人也
- 16 院々——終夜進儼吹笙也 一義云 驅儼ハ 二二句ニ

云イハタス 三四句ハ 金吾不禁シテ 除タニハ 終夜
遊戯サスル

17 ホトニ 吹笙宮女モ クタビレタソ 坐字ハ 立部 楽

ヲ 坐シテスルヲ 世ノ顛倒シテ カワルヲ ソシル也

道之廢故也【廢(廢)】

18 箏 坐部 而堂上之樂也 笙 立部 而堂下之樂也 今

坐吹笙者 終夜奏之 樂人倦之故也 又義 坐

19 吹笙ノ点也 樂人クタヒレテ ヒヤウシ ソロワヌ也

坐字 文選陸士衡長歌行 容華風夜零 牀一澤坐 自捐

【風】右傍に「ヒ」、左傍に「夙」。「夙夜」にすべき【坐】

左傍に坐【】

20 善註 無【レ】故自捐曰【レ】坐也 濟曰 夙ハ 早 零ハ

落也 牀澤 身之光潤 捐 弃也【弃(棄)】

21 心華云 沈香火底ノ 樂人ト 例ニ隨テ 居ハ 即美人

述懷也 村講云 上解非也 只言宮中 除夕所有也

22 金吾 續翠云 此篇賦君臣事也 隋帝極豪華 以亡矣

唐明皇亦如【レ】此 奢則必可亡也

23 文選東京賦 卒歲大難 駭除【二】群 獮【一】方

相乘【レ】鉞 巫一覲操茹 振子万童 丹首玄

製【覲】左傍に「カンナキ」【丹】左傍に「アカキ」

一六一

1 古註 月令 季冬命有司 大雉旁磔 云々 旁磔於四之

門 案中記 除【この頁は白紙頁に貼り紙したもので、別

筆のように見える】

2 日雉皆鬼神状 一老人為雉翁雉母

3 事文 駭雉 東海度素山有神荼鬱壘之 以禦凶鬼 為民

除害 因制駭雉神【之】以【之間に挿入符あり、右傍に「神」。

「鬱壘之神」にすべき】【「雉」神【之間に挿入符あり、右

傍に「之」。「駭雉之神」にすべき】

4 唐志云々 方相氏右執盾導之 唱十二神名 以逐惡鬼

5 事文 方相氏黃四目 蒙熊皮 玄衣朱裳 執戈持盾 率

百隸乃童子 而時【黃】四【之間に挿入符あり、右傍に「金」。

【黃金四目】にすべき】

6 難以逐惡鬼于禁中 黃門唱 振子和 曰 甲作食□ □

胃食虎 雄伯食魅【甲作食□(弓*凶)】【□(月*弗) 胃食

虎】

7 騰簡食不詳 攬諸食咎 伯奇食夢 強梁祖明共食磔死寄

生 委隨食

8 覲 錯斷食巨 究奇騰根共食蠱 凡使十二神追惡凶 赫

女軀 拉女幹節

9 解女肉 抽女肺腸 女不急去 後者為粮 見山海經

及後漢禮樂志【粮(糧)】

10 赫 玉篇呼梅切赤兒盛也 恐嚇乎 嚇 呼駕切以口□人ノ謂之嚇

又呼格切 距鷄距也

11 □者 □歟 勻會 凶古作□ 胃 直又切 裔也 拉

力者切 折也 左傳曰 拉公幹而殺之【□(弓*凶)者】【□

(歹*凶)歟】【凶古作□(歹*凶)】【この頁は白紙頁に貼

り紙したもので、別筆のように見える】

一六二 (空白)

一六三

- 1 太平廣記二百三十六卷 廣唐貞觀初 天下又安 百姓富贍 公私少〔レ〕事 時屬〔レ〕除一夜 太宗盛飾〔二〕宮掖〔一〕 明設〔レ〕燈燭 殿〔一〕廣 右傍に〔ヒ〕。トルベキ
- 2 内諸房 莫〔レ〕不〔レ〕綺麗 后妃嬪御皆盛〔レ〕衣服 金翠煥爛 然設〔二〕庭燎階下〔一〕 其明如〔レ〕昼 盛奏〔レ〕歌 樂 乃延蕭后 与同
- 3 觀〔レ〕之 樂 閔 帝謂〔レ〕蕭后曰 朕施設孰〔二〕与〔一〕 隋主〔一〕 蕭后咲而不 〔レ〕荅 因問〔レ〕之 后曰 彼乃亡國之君 陛下開基之 〔一〕益 右傍にヒ。トルベキ
- 4 主 奢侈之事 固不〔レ〕同〔レ〕年 帝曰 階主何 如 蕭后曰 隋主享〔レ〕國 十有餘年 妾常 侍 從 見 〔二〕其淫侈〔一〕 隋主每〔二〕一 除夜至〔二〕園夜〔一〕 殿前諸院 設〔二〕火 山數十〔一〕 尽 沈 香木 根也 每一山皆 焚〔二〕沈香數車〔一〕 火光 暗 則以〔レ〕甲煎沃〔レ〕之 焰起數
- 6 丈 沈香甲煎之香 傍聞〔二〕數十里〔一〕 一夜之中 則用〔二〕沈香〔一〕二百餘乘 甲煎過〔二〕二百石〔一〕 又殿内 房中 不〔レ〕燃膏火
- 7 懸火珠一百二十以照〔レ〕之 光比〔レ〕白日 尽 明月一 宝夜 光珠也 大者六 七寸 小者猶三寸 一珠之價 直 數千萬 妾觀陛下

- 8 所〔レ〕施 都無〔レ〕物此 殿前所〔レ〕焚 尽是柴木 殿内所〔レ〕燭 皆是膏油 但覺〔二〕烟氣薰人〔一〕 實未 〔レ〕見〔二〕其華麗〔一〕 然亡國之 〔一〕無 〔一〕物 間に挿入符 あり、〔此〕 右傍に転倒符ある。〔都無此物〕にすべき
- 9 事 亦願陛下遠〔レ〕之 太宗良久不〔レ〕言 口刺〔二〕其奢〔一〕 而心 服〔二〕其實〔一〕 出紀聞
- 10 或云 此篇外美華麗 内含諷刺 似前宮詞 院々焼灯 乃民膏也 桃云 已前宮詞 借漢譏唐 此詩借隋譏
- 11 唐也 又云 慈氏云 坐吹笙字妙也 王建自愧於心也 二百四十人ノ員ニ 備テ ケウケウ坐ニ 連テ 笙ヲ 吹 マテ也 高
- 12 官高位ニモ 不被用之歎カ アル也 東漸義也 東漸義 ハ 大畧慈氏勝之義也
- 13 坐吹笙 幻按 張楷和唐音 和顧連翁韻題葉道士山房詩 松下幽亭竹下橋 独携黃鶴坐吹簫 盖
- 14 笙簫為其樂器者 相近 然則坐吹者 不涉坐部 立部之 論平
- 15 秦中記云 除日儼皆鬼 神状 一老人為〔二〕儼翁儼母 〔一〕 又東漢後紀 歲除大儼 選〔二〕中黃門子弟年十 歲以上 十二歲
- 16 以下百二十人〔一〕 謂〔二〕之儼子〔一〕 皆赤 幘 皂衣 執〔二〕大鼗鼓〔一〕 方相氏 黃金為四目 熊皮帽 玄衣朱 裳 口筏持盾 率〔二〕筏 右傍に〔戈乎〕 〔一〕幘 について、 一六三 17に小文字書き 幘 玉篇 側革切 覆髻ノトリヤフト となる 〔一〕發 左傍に フリツ 〔一〕 〔一〕オキ丸 〔一〕執 〔一〕

17 司隸 分隊 口作讎々之声 以驅鬼疫 云々 古本註載

此秦中記等【讎】右下より「奴何切 選注」とある

18 和勻無之 魯考之

19 水色籠烟云々 雪按 瑣碎録 染色部云 染 滲色 先

用五倍子梅子葉各口染了 後用白礬籠黯紫 不犯鉄【口】者

十火【者】

20 鮮翠法染紫色了 即以烏豆煮汁 籠色黯 鮮翠

21 笙 蓋雖堂下 立部 伎之樂 通宵不【レ】耐立 故坐之

也 雪義

22 注 赤幘 説文 髮有巾曰幘 独断日 漢元帝額有壯髮

不欲人見 故加幘 以巾包之也 至王莽内加巾 故時人

云 王莽秃 幘施 履髻 謂【施】履 間に挿入符あり、

右傍「屋又」。「幘施屋 又履髻」にすべき【履】右傍

に「屋平」

23 之幘 漢書 卑賤執事不冠者 所服 或謂之承露 後世

以為燕巾 襦 單衣也 又光武岸幘見馬援 一説古者有冠

無幘 其加者有頰 所以安物 【頰】後に挿入指示あり、

「所以安物」とある。「其加者有頰 所以安物」にすべ

き【頰】左傍に小文字書き「玉蘭 頰丘 反 音頰」と

ある

一六四

1 注 □音柿 □亦階也 文選西京賦 金 □玉階 按

文選注 □俟 善曰 廣雅曰 □砌也【□戸*巳】「階」

左傍に「キサハシ」【この行まで「宮詞二首」二首目の原

典テキストが置かれている】

2 銀燭——續翠講云 銀燭秋光——銀□光ヲ 曰秋光也

寫【二】出婦人凭【レ】夫而独卧之兒 銀□ホト イカメイ

【□「火*虫」(燭)】

3 者ハ ナケレトモ 独卧シタホトニ 如【二】秋光【二】也

又秋夜ナル間 燭ヲモ 冷ト云也 秋光字 ヲモイヨラ

又 秋光冷畫屏ト

4 云 ウエニ 銀燭字ヲ 添タ様也 輕羅——二句ハ

猶面白 此句ワ アリ事ニテ 扇ヲコソ 持ツラウシテナ

レトモ 秋ニ

5 扇ト云ヘハ 有怨女情也 腹力立ツホトニ シヲモナイ

ソコノチト 云テ ソバノ螢ヲ 無理ニ 打ツ也 螢ニ

モ 扇ニモ 心ハナイン

6 別ニ 恨ムル心カ 内ニ アルホトニ 撲也 二句ニ

一句ハ アリ 三句ニ 銀燭秋光ノ字アリ 涼如水字ハ

有被葉捐之

7 意也 夜色ハ 螢ハ 夜有光也 二星ハ 一年一度逢ヘ

トモ 會合ノ名アルホトニ 可羨者也 我ハ 入宮以來

不羨龍【■「秋」見せ消】

8 ホトニ 難堪也 銀燭秋光カ 面白物ナラハ セメテ

ナクサムヘキニ 今ハ何物ニテ 可慰ソ 長恨歌牛女故事

ヲ 引タラハ

9 猶可面白也 二之句ハ 情深シテ 云ワレヌ処ヲ 云出

ス也 村点 涼如【レ】水 村云 流螢ノ流ハ 飛移心也

10 養按 李商隱詩 當時七夕笑牽牛 雪云 二句言 秋光

冷淡 夜色亦如水 於是乎 望君 々不来 故唯羨看二星而已

11 或云 銀燭与畫屏之交 置秋光冷三字 言銀燭畫屏冷

12 玄纖縞 孔注曰 玄黑綾縞 白綾 纖細也 縞在

「レ」中明 二物 皆當「レ」細 雪云 千字文注 月為銀燭 云々 愚不取焉

13 默云 銀燭モ 秋光モ 畫屏モ 冷也 村云 銀燭モ 秋光ニテ 物スコク 畫屏モ 冷也

14 梅云 此篇 宮女不得幸 而坐卧不安兒 銀燭 天注為 燭燭之燭 季昌為光燭之義 蓋銀光之畫屏也

一六五

1 銀燭——冷字置之秋光与畫屏之間者 蓋兼二而用之也 銀燭者 或燭臺以銀造者 或以銀箔彩燭者也

2 若得寵 則楊花撲帳春雲熱也 今反之 故云 銀燭秋光 云々 輕羅——言 胸中有愁 則所見不佳 雖無惡

3 流螢之意 時以小扇撲之 猶如英雄拔劍切地 皆自然意 氣之所發也 輕羅テ シタル 團扇ソ

4 淵云 第二句言 我寵衰 不得近侍君傍 而流螢隨意飛 到御前 故妬之撲之 螢雖無罪 撲之則有不

5 遇之意也 君得寵 則玉階夜色 私語処也 今不然也 孟暹之長信宮詩 自恨身輕不如 燕 春來還繞御簾飛

6 松月云 第二句 淵義 甚穿鑿矣 只言憤懣之餘 撲螢 遣愁而已 村義之同 「義」「之」間に挿入符あり、「同」

右傍転倒符ある。「村義同之」にすべき

7 或云 燭燭之影 或明 或暖 或暗 或冷 蓋悲歎之所 至也 若自喜者視之 則李商隱所謂燈留故人明 韓愈

8 所謂今夕知何夕 花燃錦帳中 鄭谷所謂仙漏迢々出建章 宮簾不動透清光也 若自愁者視之 則古

9 詩所謂曉燈暗虛室 夜雨滴空階 元稹聞樂天左降詩 殘 燈無焰影幢々 今夕聞君謫九江 垂死「今」右傍に「此」

10 病中驚起坐 暗風吹雨入寒窓 高適除夜詩 旅館寒燈獨 不眠 客心何事轉淒然云々 是也 由是觀之

11 開畫屏燒銀燭 則其富榮炙手可熱 今此詩曰 秋光冷者 宮女怨情 隱然言外也

12 流螢 杜集十七 醉辭判官詩 客來洗「レ」粉黛 日暮拾 「レ」流螢 又韋蘇州集第八 夜對「レ」流螢作 月暗竹亭

13 幽 螢光掃「レ」席流「酌」酬 余聞王建宮詞 選其佳者 亦少得 只世所膾炙 者 數詞而已 其間雜以他人之作 如閑吹玉殿昭華管「雜

14 醉折梨園纒帶花 十年一夢販人世 絳綬猶封繫臂紗 并 銀燭秋光冷畫屏 云々 此并杜牧之也 淚滿羅

15 巾夢不成 夜深前殿按歌聲 云々 此白樂天也 建詞 民金殿開 暫將紈扇共徘徊 云々 此王昌齡也

16 凡百有四篇 又逸詞九篇 或云 元微之亦有詞 雜於其 間 余以元氏長慶集檢尋 却無之 或者之言誤矣

17 詩林萬選 清体 題作秋夕 玉階作瑤階「清」体 間 到御前 故妬之撲之 螢雖無罪 撲之則有不

に挿入符あり、右傍に「新」。「清新体」にすべき

- 16 是建詩耳 盖二子之詩 其清婉大略相似 而牧多陰側
建多平麗 此詩盖清而平者也 愚案 王建某詩云 彼此抽
- 17 先局勢平 傍人更道的還生 兩边對坐不言語 終日皆聞
下子声 盖清婉之評 可并看也 舊本
- 18 銀燭云々二句言 銀燭与秋光共冷淡 而閨中淒涼 故出
撲螢也 然第一句 李義山雲母屏風燭影深 長河曉【出】
【撲】間に挿入符あり、右傍【以】。「出以撲」にすべき
- 19 落影西流之意也 第二句王廣津宮詞 白雪猶兒拂地行
慣眠紅毯不曾驚 深宮更有何人到 只向金階
- 20 吠曉螢之意也 或云 已下至秋思 皆杜牧詩也 遺響皆
与本集同也
- 21 和勻無之 魯考之
- 一六七
- 1 澧字見東勻 澧 水 當作澧 々与【二】長安【二】近 至
德二載 肅宗發【二】鳳翔【二】 至【二】長安城西【二】 陣
【二】香積寺之北澧水之東【二】 与賊【二】水【二】 當 間に挿
入符あり、右傍に「澧」。「澧當作澧」にすべき【二】載 右
傍に「年」【二】この行まで「城西訪友人別墅」原典テキストト
が置かれてゐる
- 2 戰 然則可以為炳證 王羲之寫豐【レ】為豐 爾來循寫
不【レ】改矣 澧レイ
- 3 補云 城西未【二】必指【二】長安城西【二】 有【二】村園門
巷枳殼之句【二】 則友人別墅在【二】南方【二】平 然則澧
- 4 水 非澧水 而増註所
謂出衡山之水也 唐音遺響澧作澧 西作边 或云 情尽
橋平 才子傳 雍陶成都人云々 後為雅州刺史 郭外
5 有【二】情盡橋【二】 乃分【レ】衿祖別之所 因送客 陶
怪之 遂於上立候館 改名折柳橋 取【二】古棠府折楊之義
【二】 題詩曰 從來
- 6 只有【二】情難【レ】【二】尽 何事呼為【二】情尽橋【二】 自
此改【レ】名為【レ】折柳 任它离恨一條々 云々 幻謂
未必情尽橋 方輿勝覽三十 刘【二】离【二】離【二】
- 7 禹錫澧州詩 秋風門外旌旗動 曉露庭中橘柚香
養按 方輿勝覽卷三十澧州 以州在澧水之北 故以為名
8 云々 又云 澧水在澧陽縣南六十步 方輿又与天隱注同
- 9 養又按 礼部韵 上声 蒼韵 澧水出衡山 因為州名
養按 才子傳第七 陶 字国鈞 成都人 工於詞賦 云
- 10 又按 礼部韵 東韵 澧 敷中切 水出扶風 又韻府東
韻 澧水名在咸陽東北 過上林苑 村義 澧ハ 里弟切
レイソ
- 11 統翠講云 一之句面白 言出也 友人別墅へ 行ニハ
ソコニ有橋 チト曲タ 処也 大路ニテワ ナイ 小路ニ
テ アルホトニ 心得
- 12 タトテ 行タレハ 兎角シテ 日暮マテ イキツカヌソ
ヲカシイ 枳殼花 アル処へ 尋テ イケト云ヲ 本ニ
シテ 尋レハ 処々 有此花
- 13 マキレテ アナタ コナタ アルイタソ 村園モ 門巷

ト同者也 下ノ心ハ 人心ハ 皆行処同也 アマリ 不遇
ナニ 某処ヘ イケト 云ホ

14 トニ イツタレハ 何処モ 同也 好賢者ト 聞テ 行
ケハ 皆好賢者ハ ナシ 我不遇ナレハ 可逢ノ処マテモ
不遇也

15 詩林萬選 平淡体 淡中有味 澧作澧 澧字雄切ノ水出
右扶風 澧力郎切ノ水出衡山【澧字雄切】、【澧】右傍に【玉】
篇二

一六八

1 第一句 我欲【二】仕官而難【レ】進 譬如【二】小路涉不
【レ】前 盖無【二】汲引者【一】也 日高 年【レ】已老也 君
家 朝廷也 我【年】已老 猶未入禁中也

2 第四句 小人之意 如荆棘 故云 枳殼花也 聴雨云
人ヲ 憑テ イカントスレハ ソレモ 相遠也 江南橋
為江北枳 ヤウニ

3 當世ノ人ハ 交節義也 韵會 紙 枳掌氏切 徐曰
即葉家枳殼也 考工記 橘踰【レ】淮化為【レ】枳 云々 枳
木高【一】紙【一】枳【一】間に挿入符あり、左傍に【一】句【一】紙【一】
にすべき

4 而多【レ】棘 可【レ】為【レ】籬 唐音遺響 詩林万
選作雍陶詩 或説作杜牧 非也 詩【一】某字見せ消。末
尾【一】詩【一】右上に転倒符ある。「作杜牧詩」にすべき

5 城西ノ字ヲ 長安城ノ西ト ミントスルホトニ 澧ト云
義力 アルソ 只澧水カ ヨイソ 城ト云ハ 夷中ニモ

ナニ城カ 城ト云事

6 アルソ 此詩ノ 体ハ 夷中ノ 体ヲ云ト 見ヘタソ
橋字ヲ 情尽橋ト云モ 非也 友人ニ 雍陶カ ソナタエ
マイラウト云タレハ

7 友人カ云事ハ 我家ハ 澧水橋ノ西ニ アルカ 本ノ大
道テハ ナウテ 西ヘ 小路ノ アル処ソト 云ホトニ

8 友人ノ 云如クニ 尋テ
行クソ 然レトモ 似タル 処多シテ 日ノ タクルマ
テ 其友人ノ家ニハ 不【レ】至 日高ト云ハ 日初出ル時
ハ 日力就【レ】山ニ 日低

9 □□□ニナレハ 日カ 外テ 高フナルソ
村園——我家ニハ 枳花カ アツテ 竹籬茅舎ソト

10 云ホトニ 枳花ヲ シルヘニ セントスレハ トノ家ニ
モ 枳花

11 カアルホトニ マキレテ 難【レ】尋ソ サルホトニ 日
高クルマテ 不至【二】其家【一】ソ

12 桃抄云 夷中ノ田園ノ イエツクリ トレモ 同様ナン
村園モ 門モ 巷モ 皆ヨウ 似タソ トレカ トレモ
ワケラヌソ マサシク 枳

13 花ノアル処ト 云ホトニ 其ヲ 本ニ 尋レハ 何 門
戸ニモ 枳殼ノ ナイ処ハ ナイソ 枳殼花ハ 此ニシ

ヤツケソ イハラト云モノソ

14 江西云 以枳殼花比小人 到处有之 枳トヨムヘシ 枳
ノ音モ アリ 別墅ハ 別業也 別業ハ 別居也 此边ニ
云山莊ノ様ナル者也

- 15 郊 毛晃曰 邑外曰郊 距国百里 墅 承與切 田廬
韻府語韻 墅 神與切 田廬
- 16 季昌力 題註 郊外聚土曰墅 養未考
- 17 澧水云々 全篇言 澧水以西 分路入城外別墅 朝出尋
之 日高未到其家 何則村園門巷相似之謂也 然時已春
而処々一樣帶枳殼花也 故雖風雨來過之地 今却相迷也
案詩家鼎鑪 蘇召叟金陵云 朱雀街頭觀 觀見
世消。左傍に「闕」。「觀闕紅」にすべき
- 19 紅 角門東畔是春風 人家一樣垂楊柳 種入宮牆自不同
蓋朝埜相反 可并見焉
- 20 和云 閑出城西日未斜 因循遠訪隱君家 溪橋流水青山
外 遶屋桑麻幾樹花
- 一六九
- 1 才子傳 杜牧 歷黃池陸三州刺史 云々 此詩守池州時
作也 亭子之子 辭助也 【この行まで「貴池縣亭子」 原典
テキストが置かれている】
- 2 亭子ハ 子ハ ツケ字ノ 枕子 扇子ノ ツレ也 サリ
ナカラ 亭子トヨムヘシシ 牧力 池州守ニ ナル時ノ
作也 月義
- 3 題注 勝覽 封字下有為字 養按 勝覽十六 池州貴池
郡縣志 梁昭明太子云々 貴池亭杜牧詩 勢
- 4 比 凌歊 七言八句 凌歊臺注 歊 許驕切 熱
氣也 字亦作嬌 或云 臺高可以凌滌暑氣 經曰 凌
歊臺在太平州北黃山上 宋武帝南遊 嘗登此臺 且建離
- 宮
- 6 趙曰 飯題格 言ハ 着題二作ノ 杜牧 池州弄水亭詩
使君四十四 兩佩左銅魚 見勝覽十六
- 7 勢比 凌歊臺乃避暑宮也 以此亭雪浪寒甚 比之 蓋
便于盛暑也 幻謂 此義無用乎
- 8 此二句 高不言高 是妙処也 亭子高 遠帆雖在百里
外 分明在目前也 開字 言掛帆也 百里外物 弁二
【也】「亭」間に挿入符あり、右傍に「言此」。「言此亭子
高」にすべき
- 9 有無二 則為「レ」奇 況分明亭子之高 可知矣 続翠
云 杜赴長安時作歊 淵云 師兄ハ 起句比凌歊ノユ
- 10 ワレ アルヘント云也 貴池臨水 似歊凌高ホトニ 万
里ハカリニ 見ヘタ也 高二 ヨリテ 寒也 【似】「歊」
間に挿入符あり、「凌」右傍転倒符ある。「似凌歊臺」にす
べき
- 11 補云 一之句 有深意歟 又以二「豪奢」二比「レ」之歟
許渾凌歊臺詩 湘潭雲尽暮山出 巴蜀雪消春水 蓋
【春】見せ消。右傍に「來」。「春水來」にすべき
- 12 貴池縣亭上所「レ」見 与二「凌歊臺」二相類 故比
【レ】之 言三四句 蜀江雪浪也 補又云 遠帆開ハ 此边
打口開 タ 【□某字左傍にヒ。トルべき】
- 13 処也 此義可也 幻謂 非也 雪本 宋祖姓劉 諱祐
築此臺 其高可凌暑也
- 14 村云 此亭雖小 其勢可比凌歊 盖所以前臨二蜀江
二 近見二百里二也 三四句言春寒和雪浪再来也

- 15 蜀江——言自蜀江所流来之雪漲 當「二此亭下」一 渺漫矣 於「レ」是 春寒過半雖「二已去」一 又隨「二雪水」一却來 盖言此亭高寒也
- 16 半強ハ 太半也 三分ノ者力 二分ハカリニ アルヲ云也 強トハ 筭ヲ 十ト ヲク 時ニ 十ノ外ニ 出ヲ云也【半】右上に挿入符あり、「強」右傍に転倒符ある。「強半」にすべき【筭(算)】
- 一七〇
- 1 或云 詩人多用強字 杜詩——秋強 又云 四松始栽時大抵三二尺強 又云 一夜水高二尺強 東坡詩 贏得兒童
- 2 語音好 一年強半在城中
- 3 一義云 去却之却字 語助也 只去ノ心也 蜀江カラ雪汁ノ トケテ 流ルハカ 滿西江テ 漲ヲ見テ 此間マテハ 半ホト
- 4 アツタ 春寒カ スツト 去テ ウセタソ 雪消ホトニ暖ニナル心カ シタソ 来字ハ 却飛来ノ類也 又帰去来之字也
- 5 西江 莊子外物篇 江西之水 疏 西江 蜀江也 江水至多 北流者衆 惟楚江從西来 故謂之西江是也【篇】「江」間に挿入符あり、「西」右傍に転倒符ある。「西江」にすべき
- 6 幻謂 此詩蜀江与西江異也 蜀江言浪江等 雪本 黃真卿夏日作云 春尽餘寒去却回 江天五月未聞
- 8 雷 南風祇在浮雲外 彈折朱絃喚不来 雪本 勢比——二句言 貴池縣□子 其高出雲雨上 今登此亭 則遠帆往來尽在此中也 百里但取於遠也【□某字右傍に「亭」。「亭子」にすべき】
- 9 雪本云 蜀江云々二句言 蜀江雪消而□為八千岷江 於是春寒亦減一半去也 来字語助也 与帰去来之来 同也 天英云爾【□「シ」不】(流)
- 10 桃抄云 遠帆開ハ 出「レ」舟ヲ也 凡舩ニ 物ヲ 積テ出ヲ 日開舩也 其マテモナイ 遠往來力 分明ニ眼界力 ヒロク開也【■某字見せ消。右傍に「帆」。「遠帆」にすべき】
- 11 三四句 興也 雪浪比小人也 春寒去却来 比乱息而有餘冠也
- 12 雪浪 續翠云 凡浪白如「レ」雪 謂「二雪浪」一 此詩只謂「二雪汁」二也 補云 蜀有白浪谷 乃盜賊之所居 雪浪亦言之也 盖
- 13 日本所謂 風吹ハ ヲキツ白浪 タツタ山ノ 義也
- 14 杜集第九 送王十五判官詩 大家東征逐子回 風生洲渚 錦帆開 又十九 別董頌詩 窮冬急風水 送浪開帆難
- 15 【送】左傍にヒ、右傍に「逆」。「逆浪開帆」にすべき 風雅集 樓前春水健帆開
- 16 勢比——月云 此一ノ句ハ カワツタソ 変体ナリ 歎ハ 熱氣也 此凌歊臺ハ 山ノ高イ処ニ 高フ作タホトニ 夏ノアツイ時モ 熱カ チ
- 17 ツトモ ナイン サルホトニ アツサラ 凌キ サクル

- 心テ 凌歊トハ 名ケタソ 此亭モ 涼イホトニ ス、シ
イ方ヲ以テ 比「凌歊臺」平 又武「某字見せ消」
右傍に「宋」。「宋武帝」にすべき」
18 帝ノ三千妓女ヲ ツレテ来ル ト云モ 奢タ事ハ 此亭
子モ ヲコッタ方ヲ 以テ 云乎 唯三四ノ句カラ 作タ
詩也 許渾
- 19 凌歊臺詩云 湘潭雲尽暮山出 巴蜀雪消春水来ト 此亭
モ 臨「蜀江」一 故云爾ノ
- 20 或義 勢比——此亭ハ チツトナル亭ナリ サレトモ
其勢ハ 宋ノ武帝ノ凌歊臺ニモ 可「レ」比也 其故ハ
此亭ハ 小ナリト云ヘ
- 21 云ヘトモ 蜀江ニ臨テ 百里ハカリノ 見ワタシハ 遠
帆モ 此亭ノ中ヘ 尽ク収マリテ 見ユル也 分明ニ キ
ツカト見ユル也 是雖「レ」小
- 一七一
- 1 可「レ」比「凌歊」勢ノ 大ナル処也 殊ニ 此亭
「蜀江」一 作ホトニ 春ニ 成テ 蜀江ノ雪モ 消
西蜀ノ江ニ 漫々ト 満ツルモ 眼
- 2 界一見ノ中ニ 見ル也 巴蜀雪消春水来ルト云ト 同シ
心也 月云 蜀ノラクハ 雪山ヘモ 近イ 西嶺千秋
アリ「某字見せ消」右傍に「雪」。「千秋雪」にすべき」
3 其カ 春ハ 消シテ 雪汁カ 蜀ノ濯錦江ニ 漲来テ
処々ニ 満ソ 此雪汁ノ 来時分ハ ハヤ 春寒ハ 過
半ハ 去ルカ 此「見せ消」

- 4 此雪汁ヲ 見テ アレハ 又 寒ナツテ 去タ寒カ ト
ツテ カエシテ来ル如ク 寒ナル也 強半字ハ ナカラス
キハ 去タ寒カ 又トツテ
- 5 カヘシテ 来ル也 卧病「秋強」ト云イ 一夜水高二尺強
二尺ハカリソ 坡カ一年強半在城中 云イ 又黃真卿春
尽餘寒去却回ト云モ 此詩ヲ 本ニスルソ
- 6 去却来ト云点アリ 此、アイタハ マダサムカツタカ
此亭ニ 上テ 蜀江ノ 雪汁、流来ヲ 見タレハ 暖
ニ ナツタ 心シテ
- 8 ハヤ餘寒ハ 皆去ル也 来字ハ ツケ字ソ 飯去来ノツ
レソ 却字モ ツケ字ソ 只サルト云マテソ 唯前義為
「レ」好ソ
- 9 桃抄云 此、地面ノ西江カ 蜀江カラ 来ルナラハ ヤ
ウモナイソ 若又地面カ 蜀江カラ 来ルマイ 処ナラハ
西江ニ 雪浪ノ 満タ
- 10 モ 凌歊臺ノ前ヘ 蜀江ノ 雪シルノ 流テ キタニ
チツトモ チカワヌト 可「レ」見ソ 筆家 半強半弱ノ
義アリ
- 11 和云 柳暗花濃厭楚臺 九華雲散画図開 江声月色無窮
意 尽入詩人眼底来 丑奴
- △異体字一覽△（一）に通行体を入れた。なお、（一）におい
て*印と+印で記すものを掲げない。また、操作困難なため、
一部ユニコードには文字がないものも割愛した。
- 【勾・韵】【淵（淵）】【悦（悦）】【往（往）】【華（華）】

【卧(臥)】【褰(褻)】【畫(画)】【盖(蓋)】【弃(棄)】【氣
【(氣)】【互(宜)】【穷(窮)】【虐(虐)】【京(京)】【况(況)】
【峽(峽)】【雞(鷄)】【縣(県)】【鼓(鼓)】【基(基)】【夷
【轟(轟)】【國(国)】【雜(雜)】【算(算)】【參(参)】【卅(三
十)】【殘(殘)】【尔(爾)】【皆(時)】【實(実)】【芻(州)
【醉(酬)】【商(商)】【耿(職)】【玠(珍)】【隋(隋)朝】【醉
【醉(翠)】【翠(翠)】【節(節)】【迂(遷)】【船(船)】【曾(嘗)】
【藏(藏)】【續(続)】【大(太)原】【太(大)明】【帶(帶)】
【怛(怛)】【歎(嘆)】【遲(遲)】【晝(昼)】【聽(聴)】【敵
【敵(答)】【答(當)】【黨(党)】【登(鄧)】【艾(奈)】
【廿(二十)】【廢(廢)】【博(博)】【發(発)】【范(範)】【富
【富(富)】【并(並)】【边(辺)】【篇(篇)】【无(無)】【楚
【野(野)】【葯(薬)】【刘(劉)】【离(離)】【粮(糧)】【类(類)】
【泉(録)】

〈付記〉

本稿は二〇一一年度中華人民共和国教育部人文社会科学研
究一般項目(规划基金項目 11YJAT51047)「日本五山僧的抄
物『三体詩幻雲抄』中汉籍征引狀況与室町时代的汉籍流布研
究」の研究成果の一部とする。

リュウ レイ／北京師範大学外国語文学学院 副教授

(二〇一四年十月三十一日受理)